
ウルトラマンネクサス アージュブルー

馬耳東風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンネクサス アージューブルー

【Nコード】

N2213Y

【作者名】

馬耳東風

【あらすじ】

ウルトラシリーズに革命を起こすかと言われる程の評価を未だに保つ「ULTRA N PROJECT」。しかし、その評価とは裏腹に打ち切りと言う非常に残念な結果に。

その際に噂になった、未発表エピソードの存在。打ち切り決定の時期から、それはありえなかったのだが、未使用の設定も数多く残っている。そこで、失われてしまったジュネスブルー編のエピソードを蘇らせようという試みに挑戦する。

散逸した欠片を発掘し、復元、そして再生して浮かびあがる、幻の

八つのエピソード。

* 時系列はEXから32話の間となります。

Secret Episode 1 噂 ルーマー

蟻の一穴。些細なことが原因となり、大きな結果を招く事を指す言葉だ。ビーストと言うとてつもない脅威、そしてウルトラマンと言う巨人の出現。それは、様々な因子による「結果」だと僕は思っていた。でも、本当の災厄に向かって、目には見えない小さな綻びができてつつあるのを、僕達はまだ知らなかったに過ぎない……。

「君達、ちょっと聞きたい事がるんだけど、少しだけ時間を貸してもらえるかな」

一人の中年男性は、二人組の女子高生に声をかけた。見ず知らずの中年男性から声をかけられれば、少女達は当然のごとく警戒する。しかし、そそくさとに逃げるのではなく、上から目線の様に強気になるのが、今時の世代である。

「何、おじさん。ナンパのつもり？マジウケるんだけど」

警戒しておきながら、あざ笑うかのような態度をとるのだから、こいつらは世間の本当の怖さと言うものを知らないのだろーと思いつつ溜息をついた。取材を始めてから、この手の反応は慣れっことはいえ、やはり腹立たしさはある。先日などは、男子高校生に話を聞くとしたところ、あわや親父狩りに巻き込まれそうになり、肝を冷やしたものだ。偶然通りがかった警官のおかげで事なきを得たが、それ以来ターゲットは女性に絞る様にしていた。それでも、メインの年齢層である十代から二十代前半の女性に対しては、自分との年齢差もあって、警戒感を抱かせやすい。そこで役に立っているのは、彼の名刺であった。

「別に怪しいもんじゃないよ。れっきとした仕事もあるんだ。はい、

名刺」

物珍しそうに彼の名詞を覗き込んでいた彼女達は、名詞の裏表に書かれている文字を読んで、先程までとは違う目つきに変わった。

「すごい、おじさん、ジャーナリストなんだ」

「ほんとだ。読切新聞とか週刊文秋とかそこで、名刺にも職歴も嫌味にならない程度に載せている。この名刺のおかげで、今の取材も当初懸念したよりは、彼らの不信感を払しょくするのに役立ち、大きな武器になっていた。

「えーと、この名前、何て読むの」

「ねごろだよ。根来甚蔵。年寄り臭いからね、読めなくても仕方ないか」

フリージャーナリスト・根来甚蔵。彼は、新聞や雑誌にコラムを持つ、それなりに売れているジャーナリストである。しかし、フリーと言う立場上、自分の足でネタを集め、文章を起こし、そして読者の審判をたった一人で受けなければならない。評判が悪かったり、編集部でつまらないと判断されれば打ち切りとなる。聞こえはいい職業だが、実際は毎日が締め切りと読者や編集部の評価と戦う修羅場の仕事である。最近も、これはと言うネタをつかんだはずなのだが、すっかり記録をとるの忘れてしまい、おじさんとなってしまったばかりだった。どうも、自分が酒でも飲んでいたのか、

「特ダネを掴みそうだから、期待していてよ」

と、雑誌社に放言したらしく、先方でもかなり期待感を持って待ち構えている。そんな記憶はないのだが、彼自身は酒好きだからありえなくはないと言う思いはある。それでも、それを聞いた瞬間、雑誌に穴を開けるかもしれないと言う思いで、肝を冷やした根来であ

った。そのため、ここいらで少しアクセントのある記事を書く必要があった。さもなければ、食い扶持が一つ減る事になる。その恐怖から逃れようと必死に取り組んでいるのが、今行っている取材だった。

根来はボイスレコーダーを取り出し、それを取材対象の女子高生に向けると、取材の目的となる質問を開始した。

「今、噂になっている、『バンニップ』について、詳しく聞かせてくれるかな」

バンニップ。近頃、若者の間で話題になっている、一種の都市伝説である。バンニップと言う怪物が現われ、その姿を見た者は殺されるか、記憶をなくすというものである。ここ一、二カ月もたない内に、急速に広まっている噂であり、小学生でも普通に話題にしているほどである。

普段の根来であれば、このような都市伝説などネタにするものではなかった。フリージャーナリストと言う肩書へのプライドもあり、このような与太話にまともに付き合う気はさらさらなかった。しかし、自分自身の放言で、生活の糧を失いかねない状況では、このような都市伝説も「藁にすぎる思い」と言う言葉の藁に相当する。その藁がこの一つ目のバンニップの噂だった。

しかし、原稿を納めるのは、タブロイド紙やゴシップネタを扱うような週刊誌ではなく、名のある作家が連載したり、政治や文化を扱うような類の本を出版する所である。こんな都市伝説をネタにできるはずもないのだが、根来には一つの勝算があった。

大学時代の事を思い出したのだが、卒論のテーマを決めあぐねていた時、教授からアドバイスされたのは、奇抜なテーマは求めなくていいから、ありふれたテーマを違った角度から覗くような視点を持つといい、と言う事だった。その言葉の影で、それほど素晴らしき内容ではなかったが、自分にも教授にも満足してもらえる論文が完成したのだった。これが、根来のジャーナリスト人生の糧となっ

ていた。つまり、一つ目のバンニップも、色々視点を変えてみれば、実に興味深く奇妙な点を持つ話であった。

一つは、あまりに早い急速な広まり。一カ月を超えるぐらいの期間で、かなりの年代層にまで浸透していると言うのは、携帯などでネットがさらに細分化した情報化社会を分析する切り口になる。

二つ目は、過去の都市伝説に比べて、ストーリー性が欠如しているにも拘らず、忘れられることなく定着している点。かつて、猛威を振るった口裂け女の伝説は、その背後にあるストーリー性がリアリティを増し、社会全体を覆いつくすほどだった。これは、人面犬騒動にも言えることである。しかし、バンニップは人を食らうか、記憶を消す以外は、ストーリーも何もない。何故、そんなものがここまで定着するのか、伝承と言う面での切り口もできる。

そして、根来が一番妙に思っているのは、情報を発信する中心地と言える東京都心ほどこの噂が広まっておらず、郊外に向かう程この噂は高い密度で広まり定着を見せている。情報化社会なら、もっと都心に近いほどこの手の情報は広まりやすいのに、その逆で、郊外からじわじわと噂が伝搬し定着しているのだ。これだけは、どう理屈で考えても根来には納得できる結論を得る事が出来ないでいた。しかし、ここを最大の山と考えて、しばらくこのテーマで乗り切れるだろうと考えていた。「情報化社会における、都市伝説の伝搬とその構造の分析」という題名を考え、根来は取材を続けていたが、不思議とこの取材が面白く感じ始めていた。普段は接しない若者との対話もいい刺激であったが、言葉では言い表せない情熱と言うか、何か衝動に突き動かされる様に取材に熱中し始めていた。

「年柄もなく、ジャーナリスト魂って言う奴に火がついたかな」

それはそれで、根来にとって嬉しい事ではあった。この歳になると、どこか仕事が一ティンワークに感じる部分が出てくる。流れ作業でやれば苦痛はないが、何のために仕事をしているのかわからない無間地獄にはまり込んでいく。そんな時、若い頃のような情熱

を燃やし、ガッツを与えてくれるネタに出会った際は、迷わずの熱に浮かされて仕事に集中する事が、何よりのカンフル剤である。

取材を終え、女子高生と別れると、根来は近くのコンビニで遅い夕食や煙草などを買い込み、家路についた。いつも以上に仕事への楽しみと好奇心がわき上がり、取材の結果を分析したくで胸が高鳴っている。本当に、普段の彼には珍しい事である。

ダムに偽装され、水中に設置されたT L T - Jの基地となるフォートレスフリーダム。そのブリーフィングルームでは、T L T - Jで最も発言力のある松永管理官が、M・Pセクションのリーダーである首藤沙耶の報告と今後の彼らの活動に対する事で、二人きりで話し合いをしていた。

「気になる報告がありましたね。先日的事件でしたか」

「はい。対象となったのは、警察官の高槻茂樹、男性です。彼は以前も記憶消去の対象となっており、その際の消去は成功しております。今回は、M・Pが関わる消去で二度目となりますが、そこで気になる事がありました」

「ナイトレイダーの平木隊員の報告書も目を通しました。本来は休暇中での出来事、提出義務はないのですが、事態が事態だけに報告書を上にも上げてもらいました。高槻と言う男、記憶を取り戻したと」

M・Pによる記憶消去。ビーストと戦うT L T のとしては、実力行使部隊がナイトレイダーなら、M・Pは情報部門のセクションと言える。だが、彼らが何故記憶消去と言う手段をとっているのかは、M・Pのメンバーですら把握できておらず、パニック阻止のための情報操作の一環や、被害者の心的外傷のケアのためという説明がされておき、任務の本来の目的は首藤リーダーとT L T の上層部だけの極秘事項の一つであった。そこまでの情報の機密性保持のた

めに完璧な仕事を目指す彼らにとって、記憶が再生すると言うのは決して見逃せない事であると同時に、それ以上の意味を持っていた。「はい。記憶処理の担当は野々宮瑞生。彼女の報告によると、彼女がメモレイザーを取り出した際、高槻は、『あんた達に世話になるのは二度目か。覚悟は決めたよ、やってくれ』と発言したと言っています。これは、彼が最初のメモレイザーによる消去の記憶を思い出したと言う事です」

「消したはずの記憶の再生、ですか。確かにこれは由々しき事態ですね。その案件については、上の方でも話し合う必要があります。それと、もう一つ報告と言うか、相談があるとか……」

「はい……。最近、街で噂になっている『バンニップ』の話ですが、どう考えてもビーストによる被害と、我々M・Pのメモレイザーによる記憶消去の事としか思えません。噂は次第に広範囲に広がり、秘密裏の活動にも支障が出始めています」

「記憶を消し、情報操作してまでもビーストやウルトラマン、そしてT・L・Tの活動を隠蔽している状況でありながら、どこからかそれらの情報が人々の間で形を変えて知れ渡っている。奇妙であり、見逃せませんね。緊急性は高くはありませんが、しかるべき処置が必要です。わかりました、この事は上層部とも見当した上で処遇を伝えます」

「わかりました。では、失礼します」

首藤は挨拶を終えると、基壇を上がり部屋を退出した。一人残った松永は、報告書を眉間にしわを寄せながら、再び目を通していた。冷静を通り越し、冷徹とも思える程の決断を無表情に口にする彼にしてみれば、珍しく人間らしい表情と言える。その松永の背後に、人影が音もなく現われた。吉良沢優、イラストレーターのコードネ

ームを持つ作戦参謀である。彼は、その姿は人前にさらすことはなく、基地内のあらゆる場所に設置された立体映像機に姿を投影し、外部の者とコンタクトをとる。松永は、イラストレーターが現われた事に気が付いており、振り向きもせずに話を始めた。

「消したはずの記憶が戻る。レーテに変化が表れていると言う事ですか」

「その通りだよ。でも、これは避けられない事だった。物質である限り時の流れには逆らえないからね」

「こういう事態は今後起こると言う事ですか。予測以上の早さで、事態は進んでいます。では、その先にある物は一体何でしょう」

「レーテの開放が何をもたらすのか、それはわからない。ウルトラマンやビーストの出現、それ以上の事態を引き起こす可能性もある」

レーテと言うものが何を指すのかはわからない。しかし、彼らの口調はそれがすべての核心であり、最も秘匿しなければならないものと言う慎重さが現われていた。秘密を守ると言う注意を保ちながら、二人は会話を続ける。

「事態は、僕達が思っている以上に進行している。でも、僕達は今の歩みを止めることはできない。出来うる事を為すまで。ところで、興味深い話だね、バンニップ」

「くだらない与太話と言いたいところですが、話が出来過ぎています。あからさまに我々の活動を妨害、或は世に広めようとする意思が感じられます」

「僕も同じ意見だ。ＴＬＴの活動を世に広めようとするのなら、記憶消去から逃れた者や何かを嗅ぎつけた人間が情報の開示を画策し

ているとも考えられる。面倒な事態だけれど、それは人のロジックだから、相手が人である以上は対処はできる。でも、それが人以外の意思介在しているとしたら……」

「人以外の意思とは、まさか」

「アンノウハンド。奴は、今まではウルトラマンやナイトレイダーの脅威として立ち上がる正体不明の意思だった。でも、T・L・Tそのものも奴の標的となっているとすると、この噂も奴の情報戦かもしれない」

「情報戦、ですか。それこそ、人間のロジックですね」

「確かにね。でも、アンノウハンドは明らかに意思を持った行動しているから、人間の様な思考を持っているのかもしれない。道徳や倫理などはまるで違うだろうけど。そして、奴はナイトレイダーだけでなく、M・Pの活動も邪魔を始めた。噂じゃメモレイザーは使えないからね」

「……、なるほど、そう言うことですか。噂は我々の網の目をくぐりぬけ、社会に侵攻し、広がり、そして定着する。そして、人が抱くイメージは……」

「僕が言う情報戦の意味がわかったね。だから、こちらで戦術を変えていく必要がある。ナイトレイダーの再編成がその一つ」

「再編成ですって。チェスターの運用上の目的からも、今さら手を加えることは最善ではないかと」

「もちろん、現行ナイトレイダーはそのまま手を加えない。僕が言

う再編成は、レッドトルーパーをもつと有機的に作戦に投入するの
が目的さ」

根来は家に帰り、そそくさと夕食を済ませ、酒を飲みたい気分を
ごまかすためにノンアルコーlblを一気に飲み干すと、デスク
に座りノートパソコンを開き、ボイスレコーダーの中のインタビュ
ー内容を再生しながら、大事な要点をメモし、それを原稿にまとめ
ていった。ありきたりの題材を、一風変わった視点から覗いてみる
と言う手法で考察していくと思った以上に作業は進み、編集部に送
るだけの体裁が整い始めていく。都市伝説の歴史、ネット社会、特
に携帯の発達における情報の伝達速度やルート、伝説のベースと思
われる伝承などの文学面などの知識を絡めると、驚くほど高尚な文
章に仕上がっていく。これはいける、という期待が確信に変わり、
段々と仕事が面白くなっていく。

食うための仕事だから、決して面白いばかりではない。いや、む
しろしんどい事の方が多い。好きで入った仕事なのだからと言い聞
かせるのだが、そういう仕事ばかりだとストレスがたまる。そんな
中で、今回の様にノリノリで取り組める仕事というのは貴重である。
一気に連載の二回分の原稿を仕上げてしまう驚くほどのペースだ。

余裕ができ、少しばかり、自分の好奇心のためにこの取材を分析
してみようと言う気が湧いてきた。と言うより、早々と食事を終え、
ハイペースで原稿を仕上げたのも、この取材を個人的な趣味で分析
したいと言う強い好奇心があったからだ。こんな感覚も稀であ
るのだが、仕事が面白く感じるのは結構なことだ。仕事が相棒の様
な根来にとっては、面白い仕事は歓迎すべき事だった。

要点をメモしたノートを見返してみると、やはり際立った特徴が
出てくる。この噂を知っているのは、やはり郊外からで、普通の流
行の伝わり方とは明らかに違う。しかし、地方の局所的な流行では
なく、郊外から徐々に都心に向かっていくのだ。普通とは違う情報

の伝搬が見受けられる事が一点。

次に、急速な噂の発生。バンニップの噂を知っている者たちの大半は、ここ一カ月から二カ月の間に伝え聞いている。一世を風靡した口裂け女の伝説の場合、マスコミが取り上げ収束するのが半年以上があるから、メディアが取り上げる前の期間を考えると、かなりの期間熟成された都市伝説である。しかし、いくら情報化社会とは言え、バンニップの伝説は異様な短期間で広がり定着している。口裂け女は岐阜県が発祥ではないかという推測がされているが、バンニップは短期間で限定された地域で発生した噂なのに、情報源が全くつかめない事が、特徴の二点目。

そして、根来が気になっているのは、このバンニップの噂は、固定化されたストーリーという事だった。つまり、噂につく尾ひれなどが全くなく、バンニップが人を襲う、消される記憶と言う事に終始し、サブストーリーなどが全く発生していないのだ。伝言ゲームでも明らかのように、二、三人の人間の間で情報を伝え合うだけで、話の内容があやふやになる。いくらメールで転送できるとはいえ、ここまで情報が固定化されているのは、妙と言えば妙である。若者なら、何か話を面白くしようとオリジナルの表現を入れようとする方が自然である。しかし、バンニップはたった一つのイメージとストーリーの中で生きている。何かの意思が働いているかのように……。

根来は、もう一度ボイスレコーダーを最初から聞き直した。口調や言い回しは個人で違う。それでも、話の内容は気持ち悪いと思うほど変化がない。

「こいつあ妙だぞ」

根来の嗅覚は、この発見にかなり鋭敏になってきた。これは新しい食い扶持を増やす最高のネタかもしれない。その欲望が、さらに彼の能力を高めていく。さらに、インタビューを聞いていく内に、根来は何か妙な感覚を得た。何かはわからないが、どうしても拭い

きれない違和感があった。もう一度ボイスレコーダを戻し、再生して内容を聞き直したが、やはり胸がざわざわする。もう一度、インタビューを聞き直していると、ある一件だけが妙な事を言う取材対象がいた。

根来は手帳を取り出し、ボイスレコーダーの記録と取材した時間と場所、簡単な人物像をメモした項目を見た。この声の持ち主は、今日の午後に訪れた遊園地で働いているアルバイトの十代の少年に聞いたものだった。録音内容はこうであった。

「バンニップだろ。知ってるよ。そいつに見つかった人間は食われてしまうって。でも、運がいいと記憶を消してくれるだけで済むんだろ」

なんだ、この「消してくれる」って言う表現は。他の人間はみな「記憶を消されてしまう」という被害意識のある表現を使っている。しかし、この少年の表現だと、相手に善意を感じているかのような表現になる。この遊園地では、他にも取材をしていたが、こんな表現を使った人物はいなく、この少年だけが「消してくれる」という表現を使っているのだ。根来は、さっきからその事を無意識に発見していたのだ。

ここが根来の記者の感覚を刺激してきた。変化しない噂の中で、たった一人だけ妙な表現を使う者がいる。ここ数日、とにかくサンブルをとるために百は確実に超える取材を敢行した根来の対象人物に、少年以外このような表現を使った人物は一人もいない。この広い東京で一人もいないにも拘らず、この少年だけが異質な答えをしている。この少年は、何かを知っている。バンニップを目撃したか、或は記憶を消す行為の意味を知っているのではないか、そんな推論が彼の頭の中で次第にでき上がっていく。

「こいつは、もう一度取材してみる価値があるな……」

記憶を消すなど、にわかには信じられない事ではある。しかし、

変化しない噂が限定された範囲で広がり続け、一人の少年だけが異質な回答している。これだけでも十分奇妙な話だ。記事とは全く関係のない考察になるが、根来はどういうわけか、この案件の虜になりつつあった。

少し資料を調べてみようと思い、引き出しの中を探している内に、一冊のファイルを落としてしまった。あまり細かい整理はせずにも何でもそこに放り込んだ結果、些細な衝撃で中の物が床に散らばってしまった。

「あ、畜生め、やっちゃったか」

仕事に興味がわいている時に、それに水をさすようにミスをした。かした事に舌打ちをしながら、根来は散らばった資料を整理し始めた。自分の原稿やスクラップ記事、資料、そして写真などである。ファイルに無造作に挟み込みながら片付けていくと、彼に興味を引く物が目に入った。

「おお、懐かしいな。姫矢の駆け出しの頃の写真か」

姫矢准。根来は昔この若手写真家に注目していた。彼が撮る写真には見るものを惹きつけると言うより、自ら語りかけてくるような力があつた。彼が勤めていた会社に根来の知り合いがいて、それがきっかけであり合う事ができ、彼も根来の事を人生の先輩として色々と相談してくる事があつた。

純粹すぎる。根来の姫矢に対する評価である。仕事に対しても一切の妥協がなく真剣。フアインダー越しに見る世界にも誠実に向き合う。だからこそ彼が素晴らしい写真が撮れる事を、根来は納得できるのであつたが、それと同時に、彼のその姿勢に懸念を覚えずにもいられなかった。仕事に真面目に取り組むあまり、自分を納得させられないのである。やるだけやったのだからこれでいいんだと納得しないと、仕事などはいつまでも経つても終わらないし、後ろ髪引かれる思いを引きずり続ける。しかし、姫矢はそれができなかった

た。写真を撮ること、社会に何かを発信したいと言う思いが強く、会社の仕事で要求された写真だけを撮るだけでは納得できず、これでいいのかという焦りが彼を追い詰めていった。根来も、彼の仕事への姿勢を否定はできなかったが、あのまま思い詰めるなどどこまでいくかわからない危なっかしさもあり、大人になれと諭したこともあった。姫矢の純粋さは、思いこんだら周りが見えなくなるほどのめり込む十代の少年の様な所があったからだ。しかし、姫矢は自身に嘘をつけず、自分の撮るべきものを求めて、海外勤務を希望した。

そして、しばらく経ち、姫矢准の名を世に知らしめた戦場の少女の写真が撮る事が出来たのだが、皮肉にもそれが彼を苦しめる事になった。世界に何かを発信したいと言う思いで彼がカメラに収めた被写体は、意図しなかった戦場での若い少女の死。そして、彼はその少女の死で名声を得た。世の中から見れば普通の事であっても、純粋な彼にとっては重すぎる十字架となった。やがて、姫矢はとてつもなく重い罪悪感に苛まれ、カメラを置き姿を消した。

「姫矢よう。お前の写真は人々に命の尊さ、戦争の悲惨さ、そしてこの少女が何を思ってた戦場をかけていたのかを世間に考えさせ、問いかけ、真実が何かを気付かせようと言う力を持ってるんだ。お前も、そんな人々の姿に気づけよ……」

根来は、姫矢の写真の順を追って見返してみた。就職した頃のものでは、会社の取材で行った航空自衛隊の航空祭の写真が出てくる。戦闘機などを移すカメラマンが多い中、姫矢の写真は人を写しているものが多い。空を飛ぶという特殊なスキルを持つ事に胸を張っているパイロット。パイロットや空を見上げている観客。日の目を見ることなく、縁の下で力持ちであるプライドを持ったプロフェッショナルの整備士。戦闘機をバックに息子を抱きながら妻と一緒に写るイーグルドライバー……。やはり、姫矢は人間を撮りたかったのだと根来は痛感した。しかし、要求されるのは情報としての写

真。追い詰められるのも無理はなかった。政治や社会の暗部に取り組んだ写真を撮ったのも、そこにいる人間の姿をリアルに炙り出し、世に問いかけ続けたのだろうが、若い姫矢の精神は、その誠実さの余りに苦悩に押しつぶされていったのだろう。アメリカに渡っていた頃の写真には、果てしない道を夕日をバックに疾走するライダー、立ち寄ったガソリンスタンドの陽気な親父、海岸で一人寂しく何かを思いながら海を眺める少年……。

根来は懐かしい思いで写真を見ていると、どうも頭が痛くなってくるのを感じた。少し、仕事に熱中し過ぎてパソコンの画面を見過ぎたせいだろうか。寝てしまえば治るのだが、もう少し仕事をしたい根来は、痛み止めでも飲もうと薬箱の所に向かった。あまり使う薬もないのですぐに見つかったが、薬のそばに妙なものを見つけた。メモリースティックである。根来は仕事柄様々なデータを保存する際、重要なデータが多いため、慎重すぎる程の何重ものバックアップを取る。一度、大事なデータがハードディスクから紛失して痛い目に遭っているため、パソコンのハードドライブの他、DVD-ROMが2枚、メモリースティック二つ、それに外付けハードディスクと神経質なほどにバックアップを取る。だから、家にメモリースティックがあっても当たり前なのだが、薬箱に保存する習慣はない。

「こんなところに入れたっけか、俺」

奇妙に思った根来は薬を飲むと、メモリースティックを持ってデスクのパソコンに向き合った。その時、彼が踏んだ写真、姫矢のアメリカで撮影した写真に写る少年の中に、バンニップは記憶を「消してくれる」と表現した少年、千樹憐が映っていた事に根来は気付かない、いや、見ても気がつかなかったであろう。

スペースビースト殲滅を目的とする特殊任務班、ナイトレイダーの作戦室では、松永管理官とイラストレーターが、隊員達を相手に、今後の方針の説明をしていた。

「管理官、再編成とはどういう理由ですか。我々のこれまでの作戦行動に何か問題があると言うのですか」

「和倉隊長、そういう意味ではありません。メンバーをいじると言う事ではなく、ナイトレイダーの運用をもう少し有機的にして、小回りの利く態勢にしようと言う事です」

「おっしゃる意味がよくわかりませんが……」

隊長の和倉は、まだ話の内容が解せないと言う表情だった。副隊長であつた溝呂木真也の離反とその後の顛末は暗い影を落とした件はあつたが、そのほかの隊員には問題はなく、新人である孤門一輝は予想以上の成長を見せており、和倉としては今考えうる最高のユニットだと考えていた。そんな中での再編成と言う話は青天の霹靂だった。事態を飲み込めない和倉に管理官とイラストレーターは誤解を解くべく、説明を続ける。

「再編成については、イラストレーターから説明があります。本来なら、もう一人ここにいるべきなのですが、仕方ありませんね。では、お願いします」

「では僕から説明をします。バグバズンブローラーの一件から、次第に人口が多い場所での小ビーストの発生が頻発しています。しかし、巨大ビーストの発生も引き続き起こっている。それは理解していますね」

「はい、それは理解していますが」

「問題は、人員と兵器には限りがある事です。小ビーストに人員を割かれるとチェスターの使用に重大な支障が出ます。ここがウィークポイントとなる可能性も十分考えられます。そこで、考えているのがレッドトルーパーとの作戦の棲み分けです」

「レッドトルーパーですって」

「ナイトレイダーにレッドトルーパー、他の支部にもそれぞれユニットが設置されていますが、スクランブルの回数はみなさんが群を抜いています。そのため、ナイトレイダーはビーストへの対策の要になります。そこで、チェスターを使用する対巨大ビーストを専任してもらいます」

「我々が巨大ビーストを専任する理由は」

「最も大きな理由は、機です。機は試作機としてデータ採集の役目があるので、まだ実戦配備されているのはナイトレイダーだけです。メタフィールド、ダークフィールドGという環境で安全かつ機能的に活動するには、ハイパーストライクチェスターが最も安定しています。そのためのナイトレイダーの推薦です」

「そう言うことであれば、話はわかりました。ですが、レッドトルーパーの方には……」

和倉がそこまで言いかけると、コマンドルームのドアが開き、一人の男が入ってきた。ナイトレイダーが青が基調の隊員服なのに対し、黒地にワインレッドの色が施されたレッドトルーパーの制服を着たその男は、肩幅が広くたくましい体を揺らし、顎にはひげを蓄え、実にワイルドな雰囲気醸し出していた。

「遅れて申し訳ありません。レッドトルーパーを代表し、隊長、小

林敏夫、ただ今参りました」

必要以上に大きい声で挨拶をすると、小林は孤門の隣にどっかりと腰を下ろした。ナイトレイダーの面々とは明らかに違う雰囲気の小林の迫力に孤門は圧倒されてしまう。それでも、以前の職場の上司に似たイメージもあるので嫌いではなかった。

「小林隊長には、大幅な任務変更になるので、先に案件は伝えてありました、問題ありませんね」

「管理官、全く問題はありません。隊員達も作戦対象が限定されるなら、却って行動はしやすいと言う事で意見は一致しております。それに加えて、実践装備された光学迷彩がありますので、うつつの任務です」

「わかりました。では、双方の隊長で話し合いをお願いします。わたくし達はこれで失礼します」

イラストレーターのホログラムが消え、松永も退室すると小林は一気に緊張感をほぐし、見かけどおりのあけっぱりな態度を表に出してきた。

「和倉よう、まさかこんな形の業務提携になるとは、正直驚きだぜ」

「俺もだ。最初は、背広組に現場を引っかき回されるんじゃないかと冷や冷やしたがな。この最高のメンバーをいじられてたまるかよ」

和倉はいつになく饒舌で、普段の勤勉な雰囲気とは明らかに違っている。これも、和倉と小林の付き合いが長い上に仲が非常によく、二人の間では組織の縛りが一切ないからだ。

「和倉、チェスターでビーストと戦うのは危険度は高い。それでいいのか」

「まあ、スクランブルの回数が多いせいでもう慣れている。だが、生身をさらす都内での活動も危険度は変わらないだろ。機密保持の制約も多くなる」

「それなんだよな。ま、それはイラストレーターの指示に素直に従って、現場で考えるさ。光学迷彩の投入もでかいしな。おう、孤門。新人隊員って聞いて、最初は何だか頼りないと思ってが、今じゃ貴重な 機的主要パイロットとはな」

いきなり話を振られた上、背中を力強く叩かれた孤門は、言葉もまともに返す事も出来ず、ただ圧倒されるしかない。

「はあ。あ、ありがとうございます」

「馬鹿野郎、褒め言葉を真に受ける奴があるか。若者は怒られて育たなきゃいかん。怒られている内が華だからな」

「どうも……」

言うだけ言うと、小林は席を立ち、和倉とあいさつを交わしながら部屋を出ていった。

「じゃあ、お互いに頑張ろうな、和倉。孤門、氣い抜くんじゃねえぞ。それと西条。たまには笑えよ、美人なんだからよ。じゃあな」

小林は、まさに嵐のように去っていった。たまには笑えと言われた風は、どうしたらいいかわからず、手当たりて周りに当たり散らす。

「隊長、何か言いたい事でも。孤門隊員、何を見てるの。石掘隊員、頼んだ資料はできたの。平木隊員、爪の手入れはオフにして」

風の怖さを知っているため、全員が無言で仕事に取り組む。たとえ手元になくても、仕事を作る。孤門と和倉は目を合わせると、和倉の方からウインクしてきた。どうやら、お互いに同じことを考えているらしい。触らぬ神に祟りなし、と。

「やっと終わったよ。余計な仕事が増えてえらい目にあつたよな」

「本当だよ。まさかあんなでかいネズミが出るなんてな。見た事ねえよ」

「都会のネズミは食い物がいんだ。年中あたたかいし、どんどんでかくなるらしいぞ。人を怖がらなくて、逆に噛みついてくるものいるし。憐、お前も部屋を綺麗にしとけよ。お前の部屋ならまだしも、今日みたいに調理場に出てこれると、面倒だからな。食中毒が出たら、営業停止になっちまう」

「わかつてるつて。じゃ、もう上がろうぜ。また明日な」

「ああ、じゃあな」

そんな会話をしていた二人の少年は、それぞれ別の帰路についた。一人は園外へ、憐と呼ばれたもう一人の少年は園内にあるスタッフルームへとそれぞれの家路を歩いている。

千樹憐。根来の取材に協力し、姫矢准の写真の一枚に移り込んでいた少年は、ごく最近日本に訪れ、根なし草の様に放浪していたところを、現在勤めている遊園地内のレストランのマスターの針巢直市に拾われ、空いていたスタッフルームに住み込みで働かせてもらっているのだった。食費、光熱費、家賃を面倒をみてもらっている

ため、仕事も一つではなく、遊園地のあらゆる業務を憐は担当しているが、嫌がる素振りは一つも見せず、はつらつとした表情で仕事に励むため、同年代の同僚の尾白はもちろん、遊園地の職員全員から可愛がられていた。あらゆる仕事に前向きに励む憐ではあったが、さすがの彼もうんざりする出来事が閉園後に発生した。

いつものように、レストランの厨房の掃除をしていた際、大きなクマネズミが侵入してしまい、厨房の中を走りまわった後、外に出て姿を消したのだ。その事を針巢に報告した際、彼は食べ物を扱う人間として神経質なほどの反応を見せ、食器や調理道具はもちろん、厨房全体に徹底的に消毒をかけ、それを二度繰り返すという徹底ぶりを見せた。当然と言えば当然なのだが、一度清掃を終えかけ、もう帰るだけという段階でのネズミ騒動だけだっただけに、そこからすべてやり直し、しかも二倍の量の消毒作業に捕まる羽目になり、もう外はすっかり夜だった。憐は、ようやくねぐらのスタツフルームに辿り着いたが、空腹のあまり腹が鳴って仕方ない。しかし、ネズミ騒動でいつもなら持ち帰る賄いも針巢に処分するように言われて食べ物がなく、かといって間に合わせの物で夕食を自炊する気力も今日はない。

「コンビ二弁当で済ませるかあ」

憐は、部屋から財布を持ち出し、自転車に乗って最寄りのコンビ二に向かった。近くにコンビ二はないが、15分ほど走れば着く距離なのでそれほど遠い距離ではない。疲れ切った体で自転車をこぐのは面倒だが、静かな夜に吹く夜風が体に当たるのは気持ちいものである。萎えていた気持ちがいとし、ペダルをこぐ足に力が入り始めた時、ポケット中で何かが脈打つのような感覚を覚え、憐は急ブレーキをかけポケットから、小さなスティック状のものを取り出した。

エボルトラスター。ウルトラマンの光と同化するデユナミストにのみ扱える神秘の道具。それが脈打つ時、エボルトラスターはデユ

ナミストをビーストの許に誘い、ウルトラマンとしての役目を求める。そのエボルトラスターが反応したと言うことは、ビーストの出現を意味するのだが、取り出したそれは沈黙を保っている。

「あれ、気のせいだったかな。最近多いよな、微妙な反応が」

周りも静けさを保ち、とてもビーストなどいるような気配がない。疲れているせいで、錯覚を覚えたのだろうかと思は訝りながら、再びペダルを漕ぎ始めた。

「なんだい、こりゃ」

根来は、薬箱から見つけたメモリースティックの中にあつたファイルを開き、そこに保存されていた画像を見て、驚くしかなかった。その被写体は、見たこともない戦闘機と、信じがたいほど巨大な生物との戦いだった。下らない合成写真かと思つたが、前後の背景や被写体との距離感、影や質感などを見ると、とても合成とは思えない。そうなると本物としか思えず、驚異的な写真であるのは間違いないのだが、根来自身にそんな写真を撮つた覚えがないので、どうしても釈然としない。いつもの習慣であるバックアップを調べてみたが、このような画像ファイルは存在せず、このメモリースティックのみにこのデータが存在するのだ。ましてや、電子記録に関しては非常に几帳面な管理をする根来には、プライベートの画像を仕事の記憶媒体に紛れ込ませることは絶対にしない。つまり、この画像ファイルは彼自身で保存し、しかも見つけにくい薬箱にしまった事になる。「何で俺の手元に、こんな覚えのないファイルが、このメモリースティックに一つだけポツンとあるんだ」

考えても思ひ出せないし、段々頭痛もひどくなってくる。薬がま

だ効かないだろうと思ひ、根来はもつと念入りに画像を拡大して調べてみた。戦闘機は、どう見たって航空自衛隊の物に見えない。極秘に製造された新兵器だろうか。そうなると、日本は影で兵器を作っている事になるぞと、根来は考えてみた。それはものすごいスcoopなのだが、その戦闘機と交戦しているこの巨大な生物が気になった。どう考えても常軌を逸した存在だ。こんな生物がこの世にいてたまるかと根来は考えたが、こうして被写体として残っているのだから、この生物も実在している可能性がある。問題は、戦闘機は現実的なこじつけができるが、この生物はどう考えても、納得行く仮説を引っ張り出せない。

根来は、さらに食い入るように画像を拡大して画像を調べ、細部まで手掛かりを探そうとしていた。しかし、その作業を進める程、頭痛はひどくなり、次第に作業が続けられないほど痛みが激しくなっていく。これはまずいと、薬箱からもう一錠痛みどめを飲もうと立ち上がったが足元がふらつき倒れ込んでしまった。そして、そのショックが頭に伝わると、根来の視界は真っ白になり、自分の部屋の中ではない別の光景が挿入されてきた。何かを渡す男女の二人組、自分を追う黒いスーツの集団、青い服を着た青年、不思議な三人組がいる部屋、どこかの地下施設、そこで出会う姫矢、そして眩い銀色の光を放つ人影……。それらが、フラッシュバックの様に視界に展開され、根来は息を呑んでそれらを知覚した。それは、誰かの行動を見たのではない、自分自身の視線で展開する光景、つまり一人称の物であった。そうなると、根来は記憶にないこれらの鮮明な場面に立ち会っていた事になる。

「何だった、今のは……」

自分の身に起こった事が理解できず茫然とするしかない彼であったが、頭痛はさらに根来を苦しめる。床の上で唸りながら苦しみ続けること、数分間。次第に痛みが引いていった根来は、ようやく平静を取り戻した。しかし、その目は見開き、顔には驚愕の表情が浮

かび上がっている。

「覚えている、俺は覚えているぞ。あの画像も、それにまつわることも、姫矢のこと……。」

根来は、床から跳ね起きると、メモリースティックや取材資料を鞆に詰め込み、部屋の電気を消し忘れるほどの慌てようで、部屋を飛び出していった。

隣は夜道をコンビニを目指して自転車を走らせていたが、再びエポルトラスターが反応したのを確信した。しかも、反応は弱いが確実に続いており、どこかにビーストが潜んでいる事は確かなようだ。

「飯どころじゃないな」

隣は方向を変え、自転車をこぎ出した。そのそばを一台の運送トラックが追い越していった。運送会社のペイントがしてあるが、実はこれがレッドトルーパーの移動指令室であった。人口密集地での行動のため、迅速に現場に移動するために、近郊に仮設の基地を増設し、そこから武器や通信、分析機器を搭載したトラックで彼らは現場に向かっていった。小林は、画面に移るイメージ画像のイラストレーターから指示を受ける。

「小林隊長、先程検知したビースト振動波は非常に微弱です。小ビーストにしても小さすぎる程の反応ですが、このケースはあまりありません。こちらでも位置は随時指示しますが、後はレッドトルーパーの足と目で調査する事になります」

「了解。光学迷彩使用の許可を願います」

「許可します。試験運用も兼ねていきますので、データ採集も並行して行います」

「わかりました。中山、塚本。バイク部隊、光学迷彩を起動し、出勤。嵯川と名古屋はこのまま俺と現場に向かう」

中山が無線で指示すると、了解と言う返事を変えてきた。小林達とは別の場所と待機していた中山、塚本両隊員は、隊員服を隠すために来ていた服を脱ぎ捨てると、バイクに乗りこみスイッチを押した。すると、彼らとバイクの姿は周りに溶け込み、完全に見えなくなった。これは、チェスターに使用されているオプチカムフラージュの技術を小型化し、隊員服や搭乗するバイクに搭載したものある。制限時間はあるものの、光学迷彩としてのレベルは非常に高く、人口密集地での活動には絶大な効果を発揮する。姿を消した二人は、小林達を追って現場に向かった。

トラックの中では、通信の名古屋を除き、小林と嵯川がプロテクターなどを装備し、デイトランチャーの準備を整えていた。レッドトルーパーはナイトレイダーとは違い全員が男性メンバーの構成で、通信、策敵、運転担当の名古屋以外は体の大きい肉体派で、見るからに陸戦部隊と言った風貌である。そのため、携行するデイトランチャーのような大型火器も幾分小さく見えるほどだ。

「隊長、もうすぐイラストレーターから指示されたポイントに到着しますが、ここはかなり人通りの追い所です」

「妙だな。これだけ人が密集する場所でのビースト出現とは……。第一、目撃者が頻発するだろう」

「私に疑問をぶつけられても……」

「それはそうだな。イラストレーター、ここはあまりに人通りが多すぎます。ポイントに間違いはありませんか」

「ビースト振動波の発生地点に間違いありません。ターゲットも一直線に移動しています」

「一直線、ですか」

トラックは指定されたポイントについたが、人々の様子に騒ぎはなく、とてもビーストが発生しているように思えない。

「名古屋、策敵して、上空にレーダー感度を上げる」

「了解。……、隊長、反応は全くありません」

「やはりそうか。ん、待てよ。名古屋、レーダーを最高感度にして地下に向ける」

「了解。……、隊長、反応が微弱ですがあります。この車両から後方より接近しています」

相手は地下から来る、小林は何かに気付き、フロントガラスから前方を除き、何かを発見した。

「名古屋、あのマンホールの上に駐車しろ。嵯川、整備用の蓋をあけて、そこから地下に潜入する。敵は恐らく下水道を伝って移動して、出口を探しているんだ」

「わかりました」

「中山と塚本には、敵の後方からマンホールに侵入しろと伝える。下水道内は一本道だ、確実にはさみ撃ちにして仕留められる」

小林は適切な指示を部下に素早く与え、嵯川に続いてマンホールの中に飛び込んでいった。梯子を使う暇も惜しみ、壁面に足を突っ

張らせて滑り落ちていく。下水道内は悪臭がひどく、ヘルメットをあらかじめフルフェイスにしていたのが幸いだった。

「フルフェイスじゃなきゃ、ビースト以前にこの悪臭でやられそうでしたね、隊長」

「まったくだな。まあ、この汚水も我ら人間様が垂れ流しているんだ。ビーストと同じくらい始末が悪いな。おう、サイレントモードにしておけよ。何しろ上は人でこった返している。ランチャーの音は派手だから、聞こえるとまずい」

「了解。若干威力は落ちますが、4人で狙い撃ちにすりゃ、小ビーストなら楽勝でしょう」

「馬鹿野郎、楽勝なんて現場にはないんだ。そう言う奴から先に死んでいくと思え」

「わかりました」

二人は、注意を前方に向け足を進めていく。暗い下水道の中は視界が悪く、いやがうえにも恐怖を喚起する。果たして、前方からどんなビーストが来るのか、小林と瑳川は背中に嫌な汗が流れるのを感じた。

「待て。何か来るぞ。音がする」

「確かに。中山と塚本が来るにしては早過ぎますね」

「ランチャーを構えろ」

緊張感が最高に張り詰めた中、二人は銃を構えた。逃げ場はない、最悪でも進行を止めなければ、命はないだろう。次第に足音が高く

なる。コンクリートに何かが擦れる音まで聞こえてくる。引き金に賭ける指が今にも引きそうになったその時、暗い下水道の中で、ライトに照らされたのはおぞましい生物の姿だった。

全身の毛が金属質の輝きを持ちながら輝き、長い尾を振り回し、口からはげっ歯目のような歯が突き出している。まさにその姿はラットのフォルムをしているが、ビースト特有の奇怪な生物感がより一層不気味さと恐怖を振りまいている。しかも、ラット類の特徴を持っているため、異常に足が早く機動力がある。

「撃て、奴の足を止める」

小林と嵯川は発砲を開始した。ランチャーを食らえば、大抵のビーストは殲滅できるのだが、体毛が固く変異しているため、攻撃がなかなか効力を発揮しない。しかし、冷静な小林は、体毛の少ないうえ、どんな生物でも弱点となる顔面を的確にとらえる。そのため、ビーストは前進を止めざるをえない。嵯川もすぐにそれに気がつき、標準を修正してビーストの顔面に攻撃を集中する。

しかし、足止めだけできても倒せなければ意味がない。ランチャーのエネルギーも無限ではないため、いつまでもこんなことは続けられない。焦りが生まれそうになったその時、後方からも攻撃が始まった。中山と塚本が合流したのだ。完全に挟み込まれた形になったビーストにも焦りが生まれ、拳動がおろおろし始めている。ビースト一体にランチャー4丁なら十分に勝ち目はある、4人がそう思ったとき、動きを止めていたビーストに変化が起こった。

金属質の体毛がさらに伸長し、尾が太く長くなり、鋭い歯がさらに刃のような鋭さを増していく。

「クソ、変異しやがった」

小林の危惧は最悪の形であたっていく。後方に展開していた中山と塚本は強靱な尾で薙ぎ払われ、コンクリートの壁面に叩きつけられた。防御力を増したビーストは、ゆっくりと前進し、小林と嵯川

との距離を詰めていく。ああ、これで殉職、二階級特進か。そんなあきらめが小林の脳裏をよぎった瞬間、守護神が現われた。

暗い下水道内に眩い光が走ったかと思われた次の瞬間、ビーストは何かに引きずられるかのように後方に下がっていく。ビーストの背中越しに小林が見たのは、光輝く銀色の人影だった。

「ウルトラマン、だと」

コードネーム・ウルトラマン。ビーストと戦う謎の存在。ナイトライダーとも共同戦線を張れる知能を持ち、人に味方する者とTLTでは認識されている。ただ、小林が聞いていたのは、ウルトラマンは、「銀色の巨人」、「光の巨人」というように、ウルトラマンは巨人だという認識だった。しかし、今はこの狭い空間で、自分達と同じ大きさで戦っているのを見るのは、何とも奇妙な感覚であった。

ウルトラマンは必死にビーストの尾を引っ張っているが、それ以上の事はしない。一体彼は何を狙っているのだろうと小林は訝しかったが、彼と瞬間的に目があつた瞬間、その意図を理解した。

「嵯川、少しだけスリルを味わおうぜ」

「どういうことですか。……、隊長、やめて下さい。死んでしましますっ」

小林は佐川の腕を撮ると、ビーストに向かって駆けだし、口元の近くでスライディングし、腹下を滑って後方に回り込み、ウルトラマンの足元に辿り着いた。

「よう、あんた、なかなか味な真似をするじゃないか」

小林の言葉に、ウルトラマンは理解を示したのか、相槌を打つと、手にしていた尾を降ろし、大胆にもビーストの背中を前転しながら移動し、前方に降り立った。噂以上に、今のウルトラマンは怖いも

の知らずと言うか、大胆不敵な性格の様だ。

「全員ウルトラマンを援護。借りは今すぐ返すぞ」

その頃、根来は取り乱した様子である駅で下車していた。そして、息を切らせながら、夜道を必死に走り続けた。突然自分が見つけた、記憶の意味を求めて……。

人工密集地で展開するレッドトルーパーの車両の近くに、黒塗りの車が駐車してきた。メモリーポリスものだ。これだけ人通りの多い所だけに、目撃者が多くなる可能性が高苦、いつも以上に緊張感が張り詰めている。首藤リーダーはレッドトルーパーとの連携を築くべく、通信で向こうの状況の確認をとる。

「レッドトルーパーへ。これより、M・Pもミッションに入ります。そちらの状況をお願いします」

通信を専用車両で受信した名古屋は、すぐさま周到に状況を伝える。

「こちら、レッドトルーパー。現在、小林隊長以下4名は、地下の下水道内にてビーストと交戦中。なお、この戦いにウルトラマンも介入。ビーストの画像は、すぐに送りますので、各員で確認してください。以上、状況報告を終わります」

「了解」

首藤リーダーは、状況の確認をとると、冷静に的確な指示を飛ばす。

「ビーストだけではなく、ウルトラマンもこの地下で交戦している。容易ではない状況だけど、情報の漏えいは許されないわ。三沢、瑞生は向こうの通りでバックアップ。それ以外の者は、私と一緒にレッドトルーパーが展開している周囲を徹底マーク。もし、目撃者が発生した場合は、……、各自の判断でメモレイザーの使用を許可します。責任は私が持ちます」

「了解」

M・Pは車から降り、それぞれで場所を割り振りながら、配置につく。人通りも多く、目撃者も発生しやすい中でのデリケートな任務が始まる。

その頃地下では、ラットタイプのビーストと、ウルトラマンとレッドトルーパーが連携チームが激しい戦いを展開していた。先程まで、この狭い空間がレッドトルーパーに負の要素であったが、ウルトラマンの介入で逆の状況に変わる。狭さゆえにビーストも方向を変えられず、前方にウルトラマン、後方にレッドトルーパーと言う彼らにとっては、またとない有利な状況になり、逆に双方に挟まれたビーストは逃げ場を失った。

ウルトラマンは、ビーストの最大の武器である鋭い歯をかわしながら、素早い動きで懷に飛び込み速攻を重ねて、少しずつ相手の体力を削っていく。レッドトルーパーは、ビーストがウルトラマンから逃げられないようにデイトランチャーの集中砲火で絶対に後退させない。

しかし、ビーストも黙ってやられるつもりはない。まさしく「窮鼠、猫を噛む」の格言通り、追い詰められたネズミの様な執念を見せる。特攻覚悟で前進し、鋭い歯でウルトラマンの胸を傷つけて弾き飛ばす。そして、後方のレッドトルーパーには長くしなやかな尾を鞭に様に使い、武器を叩き落としたり、隊員を吹き飛ばした。邪魔者が鎮まるとビーストは前進して、この場を逃去ろうとするが、跳ね起きたウルトラマンが腕からパティクルフェザーを発射し、ビーストの肩に傷を負わせ足を止めた上で、前進を阻む。同じようにレッドトルーパーも体勢を立て直し、再び攻撃態勢を立て直す。肉体派の外見に違わぬタフさがこのユニットの大きな特徴でもある。

「中山、塚本。パルスブレイガーで冷却弾発射。奴の尾を凍結しろ」

「了解っ」

二人は、左腕に装着している索敵や通信用ツールのパルスブレイガーを180度回転させ、アタックモードに切り替えると、ビーストの尾の付け根に照準を合わせ、冷却弾を発射した。着弾と同時に凍結が始まり、ビーストの尾が凍りつき、その尾の付け根を狙って小林は発砲し、これにより脆くなっている尾は切断された。

「これで、こっち側は丸腰同然だな」

尾を切断されたビーストは、痛みには耐えかねコンクリートの液面に体をぶつけながらもだえている。その隙を狙い、ウルトラマンは真つはむ部を使いながら体を回転させ、高速のスピッキクを固く鋭いビーストの歯に命中させた。回転を加えたことで威力を倍増させていたことで、ビーストの歯は粉々に砕け散った。攻撃機手段をすべて失い、逃げ場を失ったビーストは闇雲に全身を試みる。それを察知したウルトラマンは、一旦後ろに飛び下がって距離を作ると、腰だめの態勢を作って脇腹の辺りにエネルギーを貯め込み、クロスレイシュトロームの態勢に入り始めた。

「やばい、伏せる。吹き飛ばされるぞ」

小林はウルトラマンの構えを見て熱線の発射を察知し、部下とともに伏せた。汚水の中に顔や体を伏せるのは気分のいいものではないが、命には代えられない。その姿を確認したウルトラマンは、向かって来るビーストに向かってクロスレイシュトロームを発射した。着弾の瞬間に閃光が走り、爆発が起こる。

しかし、爆発や手ごたえの割に手ごたえが軽すぎた。爆風が止み顔をあげたレッドトルーパーの面々も、首をかしげていた。ウルトラマンとの共闘は初めてだが、ナイトレイダーのデータからある程度はその能力を把握している。あの熱線を食らって爆発すれば、四方をコンクリートで囲まれたこの空間には単一方向に爆風と炎が突

き抜けるはずである。しかし、予想以上に爆発が小さく、本当にビーストを仕留めたのかと言う疑問が拭えないのだ。

その疑問は、熱線を放ったウルトラマンの方が大きいようだ。手ごたえを感じなかったのか、辺りに注意を払い続けている。そして何かを察したのか、後方に向かって猛スピードで飛び去り、その姿は闇に消えた。

小林達は立ち上がり、地上に状況を報告した。戦闘員である自分達にできることはここまでだった。この周辺をしばらく調査し、索敵の結果相手が見つからないようであれば、地上に戻っていったん撤退するしかない。まだ敵がいなか辺りを警戒する彼らの足元には、凍結させて切断したビーストの尾が転がっていた。

ビルの間の細い路地裏。人通りからは目の届かない所にあるマンホールのふたが開き、中から人影が這い出てきた。変身を解いた憐だ。重い鋼鉄製のふたを元に戻し一息ついた憐だったが、すぐにエボルトラスターを取り出し、辺りにかざしてビースト反応を探している。

「あいつ、確かにこっち側に逃げた。俺の攻撃をかすただけでやり過ごして、姿を変えて逃げたんだ」

憐は、ゆつくりとエボルトラスターを周りに向け相手を探している。こんなに人がいるところでビーストを逃がすわけにいかないからだ。そして、本当にかすかな反応を見つけた。あまりにも小さいが、確かに反応がある。

「ネズミ退治はもううんざりだよ……」

今日だけで二件目のネズミ騒動にばやいてしまうが、危険度のレベルが違いため、今は追い続けるしかない。表通りに出てエボルトラスターの反応を頼りに、ビーストの痕跡を探す憐。しかし、注意

が手元に向けられているため人の流れに乗れず、通行人とぶつかってしまった。

「あ、ごめん。大丈夫」

「いえ、大丈夫ですか……、って、憐じゃない。どうしてここに」

憐がぶつかつた相手は瑞生だった。監視者と標的。元々そういう関係だったはずなのだが、憐の勘のよさやフランクな性格、瑞生の真面目で居ながらどこかが抜けている性格のバランスと、松永の彼らの人間関係が何を生むのかと言う過程を観察してみたいという関心もあって、相手に手の内が知られている上での監視を続けながら交友関係を築くという奇妙な間柄ではあった。互いに口にはしないものの、もう友達以上の存在として認識している。もっとも、瑞生は憐がデユナミストである事を知らない。

「あ、瑞生。え、何してるのそっちこそ」

「そ、それは仕事よ、わかってるでしょ。でも、こんな時間に憐が何でここにいるわけ。遊園地から大分離れているけど」

「ああ、それは、その……。ま、たまには賄いやコンビ二弁当じゃなくて、ちゃんとした食事でもとろうかと思って」

「独りで……。憐、あなた少し臭うよ」

臭うと言われて、憐は自分の行動に不審をもたれて、デユナミストだと言う事が勘付かれたのかと思った。一人の人間としての関係を築きたい憐にとっては、出来る事なら知られたくない事だった。でも、どうしても勘付かれたのだろう……。

「え、俺は別に怪しいことはしていないけど」

「それはわかってるわよ。そうじゃなくて、憐の服とか体から、変

な臭いがするわよ。ちゃんと、着替えてきたの」

「ああ、そう言う事……」

憐は自分の早とちりだった事に気がつき、一先ずホツと胸をなでおろした。下水道の中にいて、近くのマンホールからはい出てきたのである。臭って当然だろう。

「そんなに臭うかな。じゃあ、食事はやめてスーパー銭湯にしようかな。日本のでかい風呂って気持ちいいからね、ハハハ。瑞生、仕事の途中だろ、早くいきなよ」

「わかったわよ。じゃあね」

走っていく瑞生の後ろ姿を見て、憐はほつとした。デユナミストであることは知られたくないし、本当はこれ以上は彼女に秘密なんて持ちたくない……。彼女の姿を見ながら憐は考えていたが、気持ちを撮り直し、再びビーストの追跡を始めた。それに、瑞生が近くにいるならなおさらビーストを見つけて仕留めなければいけない。エポルトラスターを覗きながら、ポケットの中のプラストショットはいつでも撃てるようにしてある。後は、敵を見つけさえすれば……。

その時、前方から悲鳴が聞こえてきた。男の声だが近い。被害者が出てしまったかと思い、憐はあわてて走りだした。悲鳴があった所まで憐が駆けつけると、一人の男が倒れ込み転がりまわっていた。原因は、彼の太股に深々と噛みついていて大きなネズミだ。

「あいつだ……」

憐は確信を得たが、ここでプラストショットを使う訳には行かず、静観せざるを得ないのがもどかしい。男の悲鳴は激痛とネズミの異様な大きさや凶暴性からくる恐怖が混じっているのは明らかだ。このままでは、足の肉を食いちぎられかねない。

その時、のたうちまわる男に噛みついてるネズミと憐の目があった。敵の存在に気がついたネズミは、現在の力関係を認識したか、男から離れると野次馬の足元に飛び込んだ。周りはハチの巣をついたように大騒ぎになり、憐はネズミを見失いそうになる。しかし、エポルトラスタールはビーストの反応を捉え続けている。ついにその姿を捉えた憐は、ネズミを追って裏路地に向かって走り出した。そしてゴミ捨て場に飛び乗り、さらに壁面を登って行くとするネズミに向かってブラストショットを発射した。光弾が命中し、派手な光が飛び散る。しかし、憐は地下で熱線を撃った時と同じ手ごたえのなさを感じた。

「また、逃げた……」

憐は、着弾した壁の近くに近寄った。その時、足が何か弾力性のあるものを踏んだ。まさかと思い、恐る恐る足をずらしてみると、そこには一匹のネズミの死体が転がっていた。寄宿学校時代、マウスの解剖もした事のある憐にとって、ネズミの死体を触ることは別にどうということはない。手にとりその体を観察した憐は、そのネズミが地下で戦ったビーストと同じ個体である事を確信した。そのネズミは尾がちぎれ、ウルトラマンの攻撃で負傷した肩と欠けた歯があつたからだ。ビルの奥所を見回してもなにも見えず、ビーストの反応もない。

「こいつがビーストだったんじゃない。寄生されて、ビーストに変えられたんだ」

憐は、そつとネズミの死体をその場に置くと、表通りを覗き込んでみた。ネズミに噛まれていた男の足からはおびただしい出血があり、欠けた歯ではいえ相当深く噛みちぎられたのだろうというのがわかる。そこに、瑞生が駆け寄ってきて男の手当てを始めた。

「三沢さん、大丈夫ですか」

「瑞生か。すまない、リーダーに連絡しろ。俺に噛みついたのはネズミだ。そして、彼らが目撃者だ……。お前は、この意味がわかるな」

「はい……」

憐はその様子を見守っていた。どうやらあの男は瑞生の同僚、先輩のようだ。それなら、それなりの対応や手当をされるだろうと思い、憐はひとまず自分はこの場から去るべきだと考え、彼らがいる通りと反対方向に向かい姿を消した。

人気の少なくなった夜道を走っている根来は、息を切らせ、ほとんど足が前に出ないも関わらず、それでも走り続けると言う意志は衰えていない。少々太り気味になってきたこの体では、これだけ激しい運動を続けるのは拷問に近いが、今の彼にとってその苦しみなど些細なことであった。突如として自分の脳裏にひらめいたビジョン、記憶の意味を理解した根来は、もうじつとしていられないのだ。記憶の意味がわかれば、その確証をとりたい。そして、もう一度何をすべきかを確認したいのだ。

信号待ちで交差点で立ち止まった根来は、息を整えながら青になるのを待ち、次第に待ちきれなくなり飛び出しを敢行した。運悪く車が右折してきた肝を冷やし、けたたましいクラクションを鳴らされる羽目になるが、根来はそれもお構いなしに走り続け、とうとうある建物に辿り着いた。うらぶれた外見の建物の立てつけの悪いドアを音を立てながら開け、暗い階段を上って一つのドアの前に根来は立っている。ドアには、「世界UFO研究所」という、いかにも胡散臭い表札が掲げられているが、根来は全く躊躇することなく、ドアを激しく叩き始めた。「おい、あんたら。俺だ、根来だ。もう一度あんた達と話がしたい。ここを開けてくれ、頼む」

根来は叫びながらドアを叩き続けたが、中からの応答はない。もうここは空き家なのだろうか、根来は不信感と諦めの気持ちで肩を落とした。すると、カチャリと鍵の開く音がした。やはりここにはまだ人がいるのだ。しかし、いくら待ってもドアが開く気配はない。根来は意を決してそつとドアを開けた。中を覗き込むと、部屋の中は明かりもついておらず真つ暗だった。誰かいるはずなのに気配が全くない。もつと中を見ようと身を乗り出した瞬間、襟をつかまれて部屋に引きずり込まれ、みぞおちに思い一撃をくらった。根来はせき込みながら床に倒れ伏したが、追い討ちをかけるように背中に人が覆いかぶさり腕をねじり上げられ、根来は全く身動きをが取れなくなってしまった。

声も上げられず、体を拘束された根来の頭上で部屋の明かりがつき、眩しい光が目にし込んできた。根来は、唸り声をあげながら必死に声を張り上げ、自分の名を名乗った。

「俺だ、俺だよ。根来甚蔵だ。まさか、記憶を消されてこの顔を見忘れたとは言わせねえぞ」

そう名乗った瞬間、体を押さえつけていた重みがなくなり、辺りを包んでいた緊張感がなくなった。根来は息を切らせながら体を起こすと、そこには知っているあの三人の顔があった。以前、隠蔽されている世間の秘密を知ってしまった根来が、謎の組織に追われていた時に助けられたのがこの三人だった。山田、青野、広川、この三人は世界UFO研究所と云ういかにも胡散臭い組織を主宰し、事実でつち上げの様なため記事を流していたのだが、それは仮の姿で、本当は世の中に裏側に潜む真実をある程度把握しており、それを強大な力でもみ消されないようにするためにため記事の中に真実を紛れ込ませるという方法をとっているのだった。記憶をなくしていた根来は、一連の秘密を知った上で関係を持った彼らの記憶もなくしていたのだが、すべてを思い出したことで、ここに再び

訪れたのだった。

「これはこれは。失礼しました、根来さん。まさか、あなたがまたここに訪れるとは思っていませんでした」

そう言ったのは、この組織を主催する山田と言う男だった。見るからに平凡な男で、仕事中也作務衣を着ている変わった男なのだが、眼鏡の奥に潜む目は凡庸な人間のものとは思えないほど鋭い光を携えている。

「俺だって、まさか会えるとは思ってなかったよ。何しろ、記憶を消されちまってたんだからな」

「そうだと思いましたよ。あれ以来、音沙汰がないんですから。ま、あの組織に喧嘩を売れば、我々の様に地下に潜るか、あなたの様に記憶を消されるか、二つに一つです。しかし、ここに再び現れたということは、あなたは記憶を取り戻した事になる。これは面白い」

「そうだろ。俺も、あんた達にここを出た後の事を話してやる。それと引き換えに、もっと深い情報が欲しい。こんな取引はどうだい」

「大胆なお人だ。だが、お互いにこっち側に足を踏み入れた者同士。ネットワークを築くのも悪い事ではない。その話、乗りましょう」

二人は顔を合わせ、にんまりと笑った。彼らは非常に近いタイプの人間の様だ。

TLETでは、レッドトルーパーとビーストとの交戦から得られた情報の分析と今後の対策が話し合われていた。レッドトルーパー隊長の小林も、ネットを介して会議に参加している。イラストレータ―は、これまでにわかった事実を検証しながら、分析を伝えている。

「今回都市部に現われたビーストは、ノスフェルに似た特徴を持っています。類似と言うレベルとは言えないほどの変異を遂げています。まず、このビーストですが仮にノスフェルバスターと呼称しましょう。ノスフェルバスターの体は、ビーストと言えませんがこの点については石掘隊員から願います」

イラストレーターの指示を受けて、分析担当の石掘りがスクリーン上にデータを表示し、説明を始める。

「レッドトルーパーとウルトラマンと交戦したノスフェルバスターから回収された尾、さらに現場付近で死んでいたネズミの細胞は一致しています。つまりこれがなにを意味するかと言うと、あのビーストはただのドブネズミに過ぎないと言う事です」

「おいおい、待ってくれよ。俺達はドブネズミを相手にして命懸けで戦っていたのかよ」

小林は思わず大声をあげてしまったが、それも仕方がない。自分たちが、決死の覚悟で戦った相手がドブネズミと言われてはたまったものではないのだろう。小林の嘆きに石掘は苦笑いを浮かべながら、説明を続ける。

「小林隊長、核心はこれからです。確かにこのノスフェルバスターが残した痕跡はただのネズミ。しかし、交戦中に見せた戦闘力や生命力はビーストのものです。つまり、この時点までは奴はビーストだった」

「どういうことだ、石掘。話が見えないぞ」

「隊長、以前ノズフェルが関わった事件で、奴に襲われた家族の両親がビースト化した件がありましたよね」

その話を聞いて、孤門は唾をぐくりと飲み込んだ。彼の中でどうしてもぬぐえない記憶となっているあの家族の一件。彼は、ビースト化した両親を目撃しているし、あの家族の悲劇にも深く関わっている。そして、あのおぞましい記憶だけを残してすべてを忘れてしまった、自分が愛した女性と同じ名を持つ理子と言う少女。つい先日もその少女と再会する機会があったのだが、理子は記憶を取り戻した上で過去とも向き合いながら足を踏み出したのを知った。それでもあの事件の事は、孤門の中では負の財産として心にこびりつき、決して繰り返してはならない戒めとなっている。少しだけつらい記憶をチクリと刺激された孤門は少し目を伏せがちに、話に静かに耳を傾けている。

「ノスフェルには、他の生物をビースト化する能力があった。恐らくバスタードの場合は、他の生物に憑依することでビースト化すると言う能力に変化させたのではないのでしょうか」

「そうになると、次に現われた時は、どんな姿や能力、体の大きさをしているのかわからないと言う事が」

「そう言う事になりますね、隊長」

「いっしー、それってビーストまで現れるまでこっちは待つしかないってことになるじゃない。いっどこにかもわからないし。姿も形もわからないじゃあさ、推理のしようもないでしょ」

「俺にそう言われてもなあ」

詩織の核心を突く指摘に、石掘は頭を抱えるしかない。しかし、相手の姿も特徴も場所も特定できずに出現を待つと言うのは、複数のビーストを相手にするのと変わらない状況だ。容易ならざる事態に、和倉も小林も部下の命を預かる身としては、あまり歓迎すべき

事態ではない。

「イラストレーター、この点については何か対策はありますか」

「ないことはありません。どんなに姿が変わっても憑依する者が一緒である限り、ビースト振動波は特定の振動幅を示します。前回の戦闘で得たデータでビースト振動波は特定しています。ビースト化すれば通常の振動幅になりますが、前回のパターンを調べれば、憑依前の数値も明らかになります。かなり低い数値になるので、この受信にはレッドトルーパーに協力してもらう事になります」

「了解。イラストレーター、今度も奴は人口密集地に現われると思いますか」

「一つのビーストの戦略は急に変わるパターンはありません。人の多い場所に現われる突破口を見つけたなら、それは彼らにとってまたとない好機。間違いなく、人口密集地に侵入するはずです」

「わかりました。レーダーの装備が終わり次第、捜査に向かいます」
小林は、自分達の任務が決定したため、その準備に取り掛かり始めた。ここで会議が終わりかと思っただ、風がイラストレーターに一つの質問をした。

「イラストレーター、一つ質問があるのですが」

「何ですか、西条副隊長」

「何故、ここにきてビーストの人口密集への進行が始まったと思いますか。そして、何故これまで人口密集地に巨大ビーストは現われなかったのですか。これまでできなかったのなら、なぜ今はできるのでしょうか」

「それらに関しては答えられる部分と答えられない部分があります。最初の問いである、今始まっている人口密集地へのビーストの侵入それは、彼らが突破口を見つけたから」

「突破口とは一体どういう意味ですか」

「彼らには、学習し自身を変化させる能力がある。人知を超える程のレベルです。それでも、今まで人口密集地に入ろうとしても入れないわけがあった。しかし、ある小さな穴を見つけて、彼らはそこを突破口にして、穴を広げていった。その結果、彼らは小型ではあるが都会に入り込む事が出来た」

「彼らを阻むものとは何ですか」

「それはまだあなた方には言えません。T.L.Tは秘密で成り立つ組織という一面がありますから、必要ではない事を教えることはできません。時が来ればそれはわかる。もしかしたら、それはそう遠くないのかもしれない。話せるはここまでです。では」

核心をはぐらかしながら、イラストレーターは姿を消した。何故、ビーストは人を捕食するのに、人口密集地に現われないのか。最前線で戦うナイトレイダーにとっては当然の疑問であった。核心はまだ開示されない。だが、進化を続けるビーストはその前提を破壊し始めているのは風も、他の隊員も感じ始めていた。

目覚ましが鳴り、憐は深い眠りから覚めた。ウルトラマンに変身した後はことのほか疲労度が大きい。傷の治りはまだしも、疲労の回復が段々遅くなっているのを憐は感じた。それが、光を手にした

者のリスクなのか、それともとより自覚している別の理由によるものなのか……。

体が重くすぐに起きあがる気になれない憐は、枕元にあつた携帯テレビのスイッチを入れ、寝ながら朝のワイドショーなどを見ていた。疲れている時の二度寝は格別である。

「……、東京都では近年増え始めている外来種の繁殖、またペットの投棄などが深刻化しており、対策が求められています。次のニュースです。昨晚、都内の路上で会社から帰宅する途中の会社員が、通り魔によって刃物で切り付けられ、足に重傷を負いました。被害者は命に別条はありませんが、数針を縫う怪我を負い、警察では目撃情報を得ながら犯人を追跡しています。……、さて、スポーツニユースのコーナーです。大相撲の来場所の番付が発表されました……」

昨夜の騒ぎは通り魔事件か。まず、間違いなく瑞生の仕事に関わる事だなと憐は思った。あの場にいた者は大勢いる。通りまで片付くはずのない、恐ろしいネズミの凶行を多くの者が目撃しているのだ。だが、その事を憐が考えても仕方ない。今は、自分の思う通り自分らしく生き、必要とあらばデユナミストとしての役目を全うするだけだ。それ以外にはない。

ギリギリまでベッドに潜り込んでいた憐だが、そろそろレストラの準備の時間になるので、ベッドから抜け出すとパンをかじりながら牛乳で飲みこみ、自宅兼スタッフルームの建物を出て出勤した。途中で尾白とも合流し、昨日のネズミ騒動の事を苦笑いしながら話し合っていた。すると、いきなり大きなクマネズミが彼らの足元を横切り、二人は思わず悲鳴を上げてしまった。

「何だよ、尾白。そんな声を出して、みっともねえだろ」

「うるせえよ。いくらなんでもあれはでかすぎるだろ。お前だって悲鳴あげたくせに」

「昨夜は、もつとでかいネズミ相手にしたんだよ……」

「なんか言ったか、憐」

「いや、なんでもない。はあ、ネズミはもういいよ」

憐は肩を落として、レストランへ向かっていった。今日も念入りの消毒から仕事が始まる。

一晚をUFO研究所で明かした根来は、目をこすりながら仕事の原稿を出版社に送ったところだった。これで気兼ねなく、個人的な興味に取り組める。根来は昼近くまでソファでいびきをかきながら寝ている山田を起こし、いい加減に大事な事を聞かせるとせがんだ。

「おい、山田さんよう。いい加減に起きろよ。さんざん飲ませながら話を聞いて、勝手に寝ちまうなんてよ。お宅からの話も聞かせなよ」

「わかりましたよ、根来さん。ま、煙草を一本吸わせて下さい。話は長いですから、のんびりと行きましょう。あの二人は」

「とつくの昔に表の仕事に出勤だよ。あんた、一体どんな生活を送ってたんだ。何だ、煙草は吸ってもいいのか」

「構いませんよ。ここは三人だけの秘密クラブみたいなもんです。全員喫煙者なのに、禁煙にする必要もない。遠慮なくやってください」

い」

喫煙者でありながら、禁煙エリアや諸事情で煙草を普段吸えない根来にとつてはありがたい事だった。ポケットから煙草を取り出し、ライターで火をつけると、深々と煙を吸い込み、ゆっくりと煙を吐いている。山田も、実にうまそうに煙草を吸っている。

「では、話を始めましょうか。根来さんの話によれば、ここを出た後、我々が教えた戦時中の地下通路を使って新宿の地下にもぐり込んだ。そこで、正体不明の生物の触手の様なもので襲われ、そこにあなたのお知り合いである姫矢と言う男が現われた。そして、彼は銀色の巨人に姿を変えて闇に消えていった。その後、彼は帰ることはなく、地下を放浪していたあなたは組織に捕まり記憶を抹消された」

「ああ。その後、公園のベンチで目を覚めました。その前の晩、酒を飲み過ぎたつていう記憶を植え付けられてな」

「あなたは本当に核心に迫ったようですね。これは有益な情報だ。そうになると、契約通り私の事もお話ししよう」

いよいよ根来が一番聞きたい事に触れる時がきた。彼がここに駆け込んだのは、秘密を共有する仲間が欲しかったこともあるが、自分以上に情報を握っているような彼らの事を知ること、さらなる真実を知りたいと言う思いからであった。それはネタをつかみたいなどと言う俗なものではなく、純粹に真実に対する探求心から来ていた。「今から二十年前、アメリカのコロラド州に不時着した未確認生命体のもと思われる墜落事故の様なものが起こりました。そして、正体不明の生物による最初の事件が発生。これは以前にお話ししましたね」

「ああ。だが、考えてみたんだが、何であんたがそんな事件を察知

できたんだ。俺と同じ日本人、しかも同じように風体の上がない
なりをしてるあんたがさ」

「ははは。風体の上がないは良かった。なかなかユーモアがあり
ますね、あなたは。実を言うと、日本人じゃないんです」

「何だつて」

「本名はウェイ・チャン。元FBIです」

意外な答えに、根来は口から煙草を落としてしまった。まさか、
この作務衣を着た中年男性が元FBIとは、驚きどころかにわかに
信じられない。

「そうはみえないでしょう。中国系アメリカ人なんですけどね。で
も、それでいいんです。まあ、この風貌ですから、日本で活動する
分には却って都合がいいんですよ。名前も山田、地味でいいでしょ
う」

「それなら、アメリカの片田舎で起こった秘密の事件も嗅ぎつける
だろうな。でも、何でそれを今も追い続けているんだ」

「友人を追っていたんですよ、私は。あの事件が起こって間もなく、
私の同僚が行方不明になったんです。日系アメリカ人のアラン・K・
クドーという人物でしてね。しかし、FBIの捜査官が突如行方不
明ですよ。普通の事じゃありません。彼が友人だった事もあって、
私が担当し徹底的に追ったんですが、間もなく捜査は上からの命令
で打ち切りです」

「それも、何かの圧力があつたためだと」

「子供でもわかりますよ。真実を追うべき立場の者がそれを止められる。普通の事じゃありません。ただ、行方不明になったのが友人であり、私も若かったですからね。独りで地道に捜査は続けた。X - F I L Eの世界を本当にやったわけです。それでわかったことですが、友人は特別なセクションに配属されていたんです」

「特別なセクションってどんな所なんだ」

「信じられないと思いますが、E S P部門、つまり超能力による捜査を行う部門です。これは真面目な話です。アメリカは極秘且つ、調査には載せないことを前提に超能力者を集めて、捜査に参加させているんです。内部にいた私が言ってます、信じていただきませんか」

「超能力……。まあ、怪物やら巨人やら見てしまうと、案外世の中なんて何でもありかもしれねえな。いいよ、信じるから話を続けてくれ」

「ありがとうございます。信じてもらわないとこの先の話ができません。この事実が彼が失踪して数年後に知った事です。そして、友人はどうもこの能力に目をつけられて姿を消したようなんです。命令書を漁っていくと、失踪する数日前にダラス行きを命じられていた事がわかりました。ダラスは色々な噂があつて、U F Oやらエイリアンの研究基地があるとか言われている曰くつきの所です。日本のことわざに「火のない所に煙は立たない」と言うものがあります。が、まさしくその通りです。そこが始まりだったんです。ですが、それつきり足取りもつかめなければ、手がかりもない。そんな状態が続きました。私も疲れ果ててF B Iを辞めました。隠蔽やら陰謀やらにうんざりしましたからね。そんな私を叩き起こしたのが、五年前です。五年前と言えば、日本で大事件がありましたねえ」

「新宿第災害の事か」

「そう。日本の大都市のど真ん中である東京の新宿に隕石が落下し、死傷者を多数出したあの災害です。日本はもちろんでしたが、海を超えたアメリカでも大きく報道されました。ですが、その距離感が絶妙だった。組織の大がかりな情報操作はそこから始まっている。5年前以前にはありません。それは間違いない。隠蔽しようとする当たり障りのない理由を取り繕うとすると、必ず無理が生じる。完璧なものなどないのに、完璧に隠そうとするからですよ。しかも、どうしても隠したい事実あるから、無理に躍起になる結果です」

「何が言いてえのか、意味がわからねえな。新宿第災害の何が不自然なんだよ。あれだけの死傷者が出て、嘘もくそもねえだろ」

「では、その隕石は誰が回収したのか。どこに持ち込まれたのか。いくら災害をもたらしたとはいえ、人類にとっては貴重なサンプルだ。でも、その回収先も分析結果も何も出てこないのはおかしいでしょう。しかも、隕石が落ちたなら、この国の自衛隊の生化学のセクションが動くはずだが、その記事がない。日本のどの新聞を見ても、いや、世界のメディアを見ても、この事件の報道は完璧すぎるんです。隕石が落ちた、その一点で終始している。あの9・11だって、今でも陰謀論などが噂に上がり、本まで出版されているに關わらずにですよ。でも、大災害の犯人は隕石だ、その一点張りです」

「一つの情報で終始する……」

根来には心当たりがあった。バンニップの噂だ。当たり障りのないシンプルな都市伝説が、全く形を変えることなく、世間を漂い続けている。それ自体が生き物のように、まるでバンニップそのものの様に。噂や情報に意思が加えられたら、それは生き物の様な動きをする。メディアに携わる根来にとって、それは突飛な仮説ではな

い。いい加減な情報であつたとしても、人々が情報を求める意思と一体化すると、それは暴力を撒き散らす生物の様に世間を暴れ回り、時には死にまで追いやることもある。まさに、情報が生き物となつて、弱い人間を食い殺した。根来にはそう言う思いが今ならできた。「チャンさんよ。今の話は、メディアに携わる俺だからこそ、同意するよ。意思を受け取つて人の手を離れた情報が、どんな生き物になるか想像もつかない。幸福をもたらすこともあれば、不幸もたらしもする。俺は、そんな商売で飯を食っていることが今ほど怖いと思つたことはない」

「意思を持つ情報は生き物。面白い仮説です。でも、そうだとするなら、あの大災害の後に与えられた情報は、本当にあつた事件の姿を消し去る役目を追つた生物なのでしょう。それを放つたのは組織です。問題は、何故その情報と言う生き物を放つたか、そこが問題です。先ほど言いましたよね、アメリカはほどよい距離にあつたと」

「その意味を教えてもらおうか」

「アメリカにとって新宿大災害は、もちろん同盟国である日本で起こつた大事件ですから、大きく報道されましたよ。でもね、やっぱり対岸の火事なんです。やはり、事件の起こつた国ではないから報道は少し醒めていて、早めに沈静化する。あの阪神大震災ですら、たつた二月後の宗教団体によるテロでかき消されてしまふほどだ。海を超えればもっとあつさり熱は下がっていく。でもね、その分だけ小さな話題として人知れない場所に散逸する。そのせいで大災害の情報隠蔽による大量の嘘情報の中に紛れ込んで、その小さな話題が生き残ってしまった。ネットは大海のようなものです。ネットサーフィンなんて言葉があるくらいですから。その大海に投げ込まれた瓶の中の手紙を拾つたのが今の仲間の二人です。彼らとは、ネットを介した友人でしてね。世間に眠る都市伝説や秘密の話題などを

共有するサロンの様なものを作っていました。そこで彼らに教えてもらったのが、新宿第災害に関する奇妙な伝説です」

「奇妙な伝説って、なんだよ」

「新宿を襲ったのは巨大な生物。それを銀色の巨人が倒したんだと」

「何だって……」

巨大な生物と言うのは、根来が所持していたメモリーに移っていたもの、そして彼自身が遭遇した謎の生物だ。そして、銀色の巨人と言うのは姫矢が変身したあの姿そのものではないか。驚愕の事実を聞くにつれ、根来の心臓は高鳴り、口の中がからからに乾いていた。

「根来さん、あなたの話と完全に繋がりましたね。おさらいしましょう。事件の始まりは20年前のアメリカコロラド州の事件。そして私の友人の失踪がそれに関わっていた。大きく事態が動き出したのが五年前。あなたの証言でこれは事実と言う事になった。そして現在。あなたは巨大生物、秘密組織、そして巨人というすべてのピースを一つにつなげた。たった一人で、しかも自力でね。これを成し遂げたのは、世界であなただけです」

「とんでもない世界に足を踏み入れてしまったんだな。俺がすべてを知ったとなれば、あいつらは何をしてるかわかったもんじゃない」

「怖いですか」

「そりゃあな。でもな、何かをすべきじゃねえかってう思いが今の俺にはあるんだ。前の俺なら、特ダネをつかみたいなんて言う思い

だけで突っ走っただけだな」

「ほう、どういう心変わりをされたので」

「昨夜話した姫矢って言う奴の事さ。俺は、あいつの仕事に対する姿勢を青臭いとか、イライラするとか、理解しきれない部分があった。あいつの純粹さに嫉妬していたのかもしれない。でもな、記憶を消されてまた真実を追う過程で、真実を求める事の壮絶さを知って、俺はあいつの心がわかった。戦場にまで足を運んで、自分の心を追い詰めてまでシャッターを切り続けたのか。あいつはただ真実を掘り当てたかったんじゃない。その真実に辿り着くまでの人々の思い、そして、真実が何かを生み出す事を目指してそこに殉じたんだなって。まあ、殉じたと言っても、どこかでまだ生きてると俺は信じてるよ」

「会ってみたいですなあ、その人物に。いやいやこれは興味本意ではなく、一人の人間として彼に会ってみたいと言う意味です。で、根来さん、あなたは何をなしますか」

「食うために書くのは変わらないよ。お宅らみたいに、地下に潜るのは性に合わない。」あなたの今回の取材しているバンニップの件、元々情報を流したのは我々です」

だが、俺も姫矢のように、人々に世界の真実を直接伝えるのではなく、一つのきっかけから真実を考えるような記事を書いてみるよ。ペンが俺の武器だ。そうだ、このメモリーはあんた達に渡しておく。情報の扱いはあんた達の方が向いている。次は守りきれるかかわからないからな」

「責任を持つてお預かりします。我々は情報を見つけてそれを発信

する術を持っているが、それに魂を吹き込む術がない。人の意思を呼び覚まし、情報に真の魂を吹き込むのはあなたの仕事です。お互いに、頑張りましょう」

「おう。それじゃあな」

根来は荷物をまとめ、部屋のドアに向かった。その時、チャンが根来を呼びとめた。

「根来さん、最後に一つだけ」

「わかった。気をつけようぜ」

根来は少し冷や汗をかきながら、建物を後にした。自分達とも組織とも違う謎の意思一体誰だ。そんな問答をしていたせいで、思わず横断歩道に足を踏み出してしまっていた。そこに、トラックが左折してきて、また根来は轢かれそうになった。トラックのドライバーから怒鳴られ、根来は頭を下げながら額の汗を拭い、家路について。今日は、駅も変えてタクシーやバスも使い、金がかかっても帰り道を変えた方がよさそうだ。落ち着きを取り戻せない根来は、その心に決めた。

根来の飛び出しに焦ったのは、レッドトルーパーの車両だった。交代で運転を変わり名古屋が担当していたが、いきなり左右を確認もせず不用意に横断歩道に踏み出した中年男性が目に入り、急ブレーキをかける羽目になった。大型車両ゆえに衝撃は大きく、精密機械を積んだトラックは大きく揺れた。

「馬鹿野郎、死にてえのか」

怒りのあまり、クラクションを鳴らし窓まで開けて名古屋は怒鳴り散らした。普段は温厚な彼が怒号をあげる事態に、小林が後ろから顔を出してなだめる。

「名古屋よう。俺達は隠密部隊だ。こそこそやるのが仕事のカラー

なんだから、庶民の方に怒鳴るなんてことをしちゃあいけないなあ」

「しかし、隊長。色々な計器を積んでいるんですよ。しかも、ミッション中なのに」

「わかったわかった。俺が運転代わってやるよ。ほれ、昼飯代わりのファーストフード。ポテトとコーヒー付きだ、すげえだろ。ま、これで機嫌を直せ」

「ガキじゃないんですから。でも運転交代はお願いしますよ」

「それでいい、それでいい。腹が減ったらイライラするだけだ」

歳の功がなせる業か、気の長い小林は名古屋と運転を代わるとトラックの運転を再開した。ミッションは長い。何しろ姿のわからない相手を探して都内の一部とはいえ車を当てても流す必要があるのだ。気長にかからないと、やっていられないのが実情なのだ。運転中は計器を見ることもないので、気分転換に小林は、車に持ち込んでいた携帯音楽プレーヤーを車につないで、BGMを流し始めた。男臭い風貌に全く似合わず、音楽は軽快なユーロビートだった。

夕方になり、遊園地の閉園時間が近づいてくる。客足が途絶え出した頃を見計らい、憐と尾白は政争に入る。今日も念入りな消毒があるため、少しでも時間を稼いで、帰宅したいためだ。憐の様子を見て、京の監視ミッションは終了と判断した瑞生は、席を立ち帰り支度を始めた。その様子を見た憐は、当たり前前の様に声をかけてくる。

「瑞生、もう帰るの」

「帰るって言うか、これも一応仕事だってこと、覚えてるの」

「あ、そうだったね……。もしかして、昨日の仕事の続き」

「そのことはあまり口にしないで。それに、あなたは監視対象なんだから、あんな場所にいると疑われる事になるから気をつけて」

「瑞生達がどこで仕事するかなんて、俺わからないよ。でもわかった、気をつけるし、瑞生の仕事の邪魔はしないから。気をつけて」

「……、ありがとう。それじゃあね」

瑞生としては、監視対象である事を知っていながら、自分に対して自然に接してくれる憐の姿勢が嬉しくもあり、心の重荷にもなっている。もちろん憐の事は嫌いではないし、寧ろ好きと言う気持ちには自覚しかけている。それ故に、仕事上で憐と接しなければいけない事がつらいし、自分の仕事に対して理解されるのも心苦しいのだ。なにもない状態でもう一度出会えればどんなに気楽か。そうすれば、もつと自分の素直に憐と向き合えるのに……。

そんな瑞生の後ろ姿を憐はずっと見送っていた。人の気持ちがわかり過ぎる程わかってしまう憐にとっては、彼女の後姿が語るその心が伝わっていた。

「瑞生、俺だつて同じ気持ちだよ。何も背負っていない俺だったら、もつと瑞生に近づけるのに……」

憐は目を伏せがちに仕事を続けた。平日なので客の帰りは早く、清掃も早めに取り掛かる事が出来たので、定時より少し遅いくらいで仕事を終える事が出来た。

「いやあ、今日は何事もなくてよかった。なあ、憐」

「ああ。でも、もしかして、またネズミがチュウと顔を出すかもよ」

「やめてくれよ。本当にネズミが苦手になりそうなんだぜ。憐、絶対部屋の掃除しとけよ。絶対出るぞ。お前、部屋をすぐ汚くするかな」

「わかったわかった。ちゃんとしとくから。じゃあな、尾白」

「おう、また明日な、憐」

友人と別れた憐は、自分の部屋に向かおうとしたが、引き返して自転車に乗って街に繰り出した。昨夜のビーストが出るような予感があるからだ。

「どうせ、あいつらの目的には、俺の事もあるんだ。出歩いていれば、向こうから来る」

生餌になる覚悟で、憐はビーストを探しに街へ向かっていく。どこまでも前のめりに、ひたすら前へ連は進み続ける。

TLT基地内では、イラストレーターがCIC内で、レッドトルーパーから送られてくる情報から、微弱なビースト振動波を探していた。現場に近い所から送られてくるデータを解析すれば、このCIC内で観測するより、遥かに細かい振動をキャッチできる。そして、その分析結果が映っている画面にわずかな変化を見つけた。「かった」

レッドトルーパーによってかけられた細かい網の目にビーストがかかったのだ。反応は微弱だが、確実に存在している。

「イラストレーターよりレッドトルーパーへ。そちらの近くにビースト振動波をキャッチ。こちらのデータを転送し、位置の確認をお

願います」

「了解。……、これは公園ですね。かなり大きい自然公園です。現場は近くです。すぐに調査に入ります」

「わかりました。一般人の避難はすぐに行える状況ではありません。光学迷彩による隠密行動をお願いします」

「了解」

小林の返事を聞くと直ちにイラストレーターは、基地内に指令を送り始める。

「レッドトルーパーが敵を捕捉。M・Pは、直ちに現場へ急行。民間人の現場への接近を阻止してください。ナイトレイダーへ。ビーストは前回ウルトラマンと交戦しています。これまでのパターンでいくと、アンノウンハンドが介入してくる可能性は大きいと言えます。チェスター各機で出動。現場の指示があるまで、上空で待機してください。レッドトルーパーとの連携で柔軟な対処をお願いします」

「了解」

コマンドルームでは、ナイトレイダーの出動準備が始まる。プロテクターを装着し各自デイトランチャーを装備する。ものの30秒もかからずに準備は完了し、ナイトレイダー隊員5名はシューターブースに乗り込み、チェスターへと直送される。そして、スクランブルが出て3分もかからない内にクロムチェスター4機は、フオートレスフリーダムを発進した。

レッドトルーパーは、日が暮れて薄暗くなり始めた公園内を、

姿を消した状態で調査していた。まだ一般人が公園に残っている可能性もあるからだが、公園内の清掃という名目で、人はほとんど外に退去させられていた。後は、ビースト振動波を辿って本体を見つければいい。小林は索敵を行っている名古屋にリーダーの反応を確認させる。

「名古屋、ビースト振動波は公園のどのあたりから発生している」

「まだ反応が微弱なため、断定は難しいですが、中山隊員の周囲がわずかに高い数値がでています」

「そのデータを、全員のパルスブレイガーに転送しろ」

「了解」

小林の命令通り、各自にビースト振動波のデータが転送され、それを基に隊員達が振動波の発信源と思われる場所に、包囲網を狭めていく。どうやら、発信源は公園の池の中の様だ。

「中山、何か見えたか」

「隊長、何も見えませんね。反応はここいらあたりのはずなんですけど」

「恐らく奴さんは、水の中と言ったところか。ミーティングでもあったが、どんな姿をしているかわからんな」

「同感です。ん、隊長、池の水面に変化が」

中山の言う通り、池の水面に気泡が発生し、次第に数を増やし大きさも膨れ上がっていく。そして、ビースト振動波を示す値が大きく跳ね上がる。

「イラストレーター、ビースト振動波をキャッチ、並びにビーストの存在を確認しました」

「了解。攻撃に移ってください。上空にはナイトレイダーが待機しています」

「了解。全員、サイレントモードで発砲開始」

レッドトルーパーの4人による攻撃が始まり、水面に水柱が立つ。姿を見せなくとも、振動波や熱源で完全に捕捉しているため、ビーストが逃げ出すのは不可能だ。彼らは、徹底的にビーストにめがけて攻撃を続けていたが、水中のビーストも我慢の限界に達したのか、水面を破ってその姿を現した。

ノスフェルバスタードと呼ばれたビーストは完全に形態を変え、今度はワニガメの形質を獲得して、その姿を現した。恐らく、捨てられた外来種のワニガメがこの公園の池に生息していて、それがビーストの格好の宿主になったのだろう。高い防御性を手にしたビーストは、デイバイトランチャーの火力では全く歯が立たない。

ビーストを探して街を彷徨っていた憐のエボルトラスターが反応を始めた。強い反応に、憐はビーストの出現を確信し、人気のない所に移動して、エボルトラスターを引き抜いた。放出された光は、デユナミストの肉体をその光と同調、合成して変異させ、その精神はそのままに肉体をウルトラマンへと変える。

新たなビーストの形態、テストダイルは四足歩行の状態で岸に上がってきた。3メートルの体格も実際以上に大きく見える。レッドトルーパーの攻撃は止むことなく続いているが、いかんせん甲羅や皮

膚が装甲化しているため、全く効果を為さない。目を狙って発砲しても、瞼まで装甲されているため、打つ手がない状況だった。しかし、それでも何とかするのが実力行使部隊の務めだ。

「全員、奴の足元に一斉発砲」

小林の命令で、テストダイルの足元に4丁のランチャーが火を噴いた。火力の絶大なランチャーの威力で、公園の柔らかい土は大きくえぐられ、ビーストはそこに足を落とす事になった。重い甲羅を背負っている分、この戦術を取られると脆い面がある。小林達は、敵の前進を食い止めると、接近戦で発砲を続ける。エネルギー残量は次第に限界に近付いていくが、ここでやめるわけにいかない。万が一打つ手がなくなっても、ナイトレイダーがバックアップするとう心強さもある。じりじりとテストダイルに接近していくレッドトルーパー。しかし、ビーストはそれを狙っていたかのように、突然を首を伸ばし、巨人な顎を持つ口を開いて噛みつきに来了。瞬間的なその動きに小林達も反応はしたものの、ビーストはデイバイトランチャに噛みつき、そのまま噛み砕いてしまった。あと一歩遅ければ、あの顎で体ごとミンチになっているところだった。銃を奪われても、まだパルスブレイガーがあると、ひるまず攻撃を続ける。まだ相手が身動きできない状況にはまっているのが幸いだった。そして、彼らの奮戦に応えるが如く、光が降り立った。

ウルトラマンはテストダイルの甲羅の背の上に立つと、相手の首がそこまで届かないのをわかった上で、甲羅の上から敵の頭部を蹴りつける。装甲の重さのため身動きのできないビーストにとっては、まさに手も足も出ない状況だった。今度こそ逃がさないとばかりに、ウルトラマンはクロスレイシュトロームの態勢に入った。

その時、ウルトラマンの上空の空間が歪み始め、そこに空いた渦の中心から禍々しい光が発生し、ビーストに降り注いでいく。そして、その光がビーストの体に変化を与えていく。テストダイルの甲羅はさらに攻撃的に鋭利になり、手足の筋肉が発達し骨格も変化して、

二足歩行を可能にした。それに伴い体も巨大化をはじめ、レッドトルーパーやウルトラマンの体を見下ろす大きさになっていく。

「アンノウンハンドか……」

小林がその名を呟くと同時に、周りの空間に変化が始まる。まるで墨をこぼしたかのようにどす黒いものが辺りを覆い始め、ビーストとウルトラマンの姿を覆い尽くしていく。やがて、そこにはウルトラマンやビーストの姿はなく、レッドトルーパーのみがそこに残されていた。小林は、パルスブレイガーを通信モードに戻し、ナイトレイダーに連絡する。

「和倉、ビーストは亜空間に移動した。後は、ナイトレイダーに任せる」

「了解、お前達は地上で待機していてくれ」

「おつ」

上空で通信を受け取った和倉は、クロムチェスター各機に指示を送る。

「チェスター各機、人口密集地により、高度1万メートルまでいったん上昇。ハイパーストライクフォーメーションに移行した後にはビーストを追うぞ」

「了解」

チェスター各機はオプチカムフラージュを解除しながらぐんぐんを上昇し、雲海を抜けたところではおパーストライクフォーメーションに移行する。そして、急降下しながら亜空間への突入を行っていく。不思議な色彩の幾つもの空間の層を抜け到達した先は、マイナスの位相の中に存在するダークフィールドGだった。暗黒の空に、

血に濡れた様が艶めかしい色が輝くこの空間は、ビーストには力をもたらし、ウルトラマンには力の制限ともたらず。巨大化と変異を遂げたテストダイルに対し、ウルトラマンもジュネッスブルーへとスタイルを変える。

変異したとはいえ、装甲の重さで動きが遅い事は解決できず、機動力ではウルトラマンに分がある。素早い動きで接近し、相手の手足や頭を攻撃する。それ以外は、装甲に覆われているため攻撃の効果が得られないためだ。しかし、皮膚自体も強化されているため、普通の打撃では全く効果がなく、逆にビーストの強靱な顎がウルトラマンの頭部に迫ってくる。それを寸前の所で両腕で受け止めるが、がら空きになった脇をテストダイルが殴りつけ、ウルトラマンは大きく突き飛ばされる。そこに、巨大な熱量をもつ光弾が発射され、ウルトラマンは正面からまともに食らい、数百メートルは吹き飛ばされた。機動力のウルトラマン、防御のテストダイル。全くスタイルの違う両者の戦いは激しさを増していく。

追撃の光弾を放とうと、テストダイルの口の中が発光を始めたところに、チェスターからアビロックとスパイダーミサイルが発射される。テストダイルに命中し、さらにその周囲に着弾することで、大爆発が起こる。濛々と舞いあがる土埃に視界をふさがれたテストダイルに、煙幕をかくぐつてウルトラマンがシュトロームソードで斬りかかってきた。両腕に深い切り傷を素早く与え、さらに胴体にも斬撃を加えるが、さすがに硬い甲羅を切り裂くには至らない。そして、すぐに狙いを変え、体を回転させながら頭部を切りつけた。しかし、その攻撃を読んだテストダイルは強靱な顎でシュトロームソードをくわえると、渾身の力で噛み砕いた。想像以上に獰猛なテストダイルの攻撃に、ウルトラマンもナイトレイダーもあっけに取られてしまう。戦いの様子を見守る孤門は、ウルトラマンが憐だと知っているがそれを言えないがために、忸怩たる思いで戦況を見守るしかない。

「憐、どうする。相手の装甲はお前の技を全部受け切れるようにな

っている……。くそ、どうすれば」

孤門が上空から見つめる中、静かにたたずむウルトラマン。しかし、打つ手がないまま真正面から相手に向かって飛び込んでいく。まるで、自殺願望でもあるかのような、理解しきれない憐の前のめりで、どこか投げやりな危険ないつもの戦い方に見えた。そのウルトラマンに、テストイルは光弾を発射した。その着弾の瞬間、マツハムーブを使い後ろに回り込んだ。そして、固く難攻不落の甲羅に對して、意味がないと思われる打撃を猛然と繰り出して言った。打つ手がない上での破れかぶれの攻撃にしか見えなかった。啞然とするナイトレイドの中で、凧だけがウルトラマンの狙いを察知した。「隊長、ウルトラマンの攻撃しているポイントに、集中砲火を」

「凧、どういう意味だ」

「ついている隙がない固い装甲でも、一点だけを集中して攻撃すれば突破口ができる。ウルトラマンはそれを狙っている行動です」

「なるほどな。よし、全砲門を開け。ウルトラマンが攻撃しているポイントに集中して火力を加える。ウルトラマンには当てるなよ」

「了解」

ハイパーストライクチェスターからあらゆる火器類が発射され、テストイルの甲羅に降り注がれる。そして、ウルトラマンものその攻撃に加わって打撃を与え、パーティクルフェザーを連射する。テストイルもダメージはないものの、攻撃の衝撃は伝わるため、それを避けようとするが、動きの鈍さが仇となり、手のうちようがないそして、頃合いを見つけたのか、ウルトラマンは掛け声と共に飛び上がると、体をスクリュー状に回転させながら降下し、回転を加えながら相手の甲羅に蹴りを見舞った。足と甲羅の接地する面から激

しい火花が散る。そして、その摩擦と衝撃に耐えかねた甲羅について亀裂が入る。それを察したウルトラマンは、光のエネルギーを弓矢状を展開し、その弓を引き絞る。そして一杯にまで引き絞った矢からアローレイシユトロームが放たれる。同時にチェスターからも、ウルトラマンと同じ照準でハイパーストライクバニツシャーが発射される。堅牢な鎧にこじ開けたわずかな隙間に集中して技を放たれ、テストダイルは爆発した。その時、ウルトラマンはセービングビュートを放ち、何かを手元に引き寄せたように見えた。

「憐、今何をしたんだ」

孤門はその行動の意味が理解できなかったが、ダークフィールドの崩壊が始まったため、操縦に集中しなければならない。次に会った時に聞いてみなければいけない。世話の焼ける奴だと孤門は思った。憐はまるで、奔放で何をしてくすかわからない弟の様に思えるのだが、弟を持つとこんなに気苦労するものなのだろうか、苦笑いするしかなかった。

チェスターの信号を確認し、ダークフィールドの消滅を確認したレッドトルーパーは、辺りを調査しながら撤収の段階に入っていた。ビーストが倒されれば、自分達の様な兵士は現場に却って邪魔になる。そう思い、小林は全員を集め撤収の命令を下そうとした瞬間、公園の片隅で何か光が舞い降りたように見えた。

「おい、なんだありゃ」

武器のない今、敵が現れると非常に厄介なのだが、彼らの目にはあの光がウルトラマンのものに思えて仕方なかった。警戒しながらその現場に近づくと、驚いた事に本当にウルトラマンがいた。青いウルトラマンは視線をレッドトルーパーに移すと、彼らはその輝きに圧倒されてしまい、パルスブレイガーを降ろすしかなかった。そ

んな彼らをウルトラマンはじつと見つめるとかすかに頷き、そのま
まどこかへ消え去って言った。一体彼が何を伝えようとしたのか、
彼らはそこで考えていたが、塚本が何かを見つけ子をあげた。

「た、隊長、亀がいます」

「何、亀だと」

小林が塚本が射す指の先を見ると、確かに亀がいた。それも、
日本にいる亀ではなく、獰猛な外国の種であるワニガメだった。そ
う、あのビーストに変えられたワニガメだ。背中の甲羅には、少し
痛々しいひびが入っているのがその証だ。それを見て、小林はなる
ほどと言いながら、笑みをこぼした。

「隊長、何がおかしいんですか」

「塚本、別におかしいわけじゃない。気持ちが良くて笑っているん
だ。青いウルトラマンは、ビーストに変えられたこの亀を助けたん
だよ。前のネズミを殺してしまった事を気にしてたんじゃないか。
それとも単に亀が好きとか」

「まさか……」

「そう思った方が気持ちがいいだろ。全く粹な奴だぜ。こっちが嫉
妬するほどいい男っぷりだ。よう、亀。検査が済んで何ともなけれ
ば、お前さんを水族館に送ってやるよ。ウルトラマンと約束した以
上、悪い様にしねえ」

「まあ、大丈夫でしょう。あのネズミも完全に元に戻っていたなら、
こいつを検査する必要もそれほどないでしょうね」

「これで、われらが友人との約束を守れるな。ホワイトスーパー

に連絡しろ。この亀を丁重にお迎えしろと。何かあれば、レッドトルーパーが反乱を起こしてやると付け加える」

「それは洒落にならないですよ……」

家路について根来はパソコンを立ち上げ、何を書くべきか悩んでいた。情報の扱いは今の自分には未熟すぎる。自分はどこか呼応妙信を捨てきれない所がある。そんな人間が情報を扱えば、どんな美麗軸を並べても、情報は歪んだ生命を持つ。俺がしたいのはそんな事じゃない。真実を見つめる目、受け止める心を喚起する記事が書きたい。それが根来の頭の中で渦を巻いていた。どうすれば姫矢のように、人の心を動かし、心の目を開かせる事が出来るのだろうか……。

「そうか、姫矢の事を書くことから始めればいいのか」

姫矢の写真が有名になり、その事を取り上げた本は多い。だが、それは彼らが受け取った姫矢像であり、メッセージだ。しかし、自分は姫矢と長い付き合いであり、同じフィールドに立っていた。そして、あいつが背負った過酷な宿命の結末を目の当たりにした。姫矢を出汁にする事に繋がりはいらないか。そんな懸念が頭をよぎった。だが、その欲に勝たねば人や世界の真の姿は伝えられない。姫矢もそうして己と、そして世界と戦い続けた。そんな男の本当の精神を伝えよう。そして、自分も姫矢になろう。来るべき真実が明かされるその日まで戦ってやる。

根来は、キーボードを打ち始めた。食うために明け暮れる仕事も大事だ。しかし、それ以上にあるがままの本当の自分を探す戦いに飛び込めた事が彼にとって幸せだった。行く所まで行けと言うのが信条だったが、今は行きたい所まで行くために死んでたまるかという心が芽生えている。彼もまた、己と人間と世界との戦いに身を投

じたのだ。

「姫矢、俺は負けねえぞ。俺も、人の心を動かす者を作り上げる。眞実を受け止める心をはぐくむものをな。それができた時は、一緒にうまい酒でも飲もうや。だから、必ず帰って来い」

ビーストは再生する。それは恐ろしい事だ。でも、人もまた人生を生きる上で何度も再生を果たす。そして強くなっていく。進化していくのは僕らも一緒だ。その再生と進化が、この先の未来を生きる上で必ず必要になっていく事を、僕たちは心の中のどこかで信じていた。そして、彼らが過酷な未来を超えていく可能性になることも。

Secret Episode 3 運命 デスティニー

運命とは何だろう。決められた未来の事なのか。人が見つける、自分の生きるべき道の事なのか。それとも天が与える偶然の奇跡……。それは、どれもがあり得るのだろう。でも、運命の中に放り込まれる人間の存在はあまりにもちっぽけで無力だ。それでも、人間はその中であがきながら、自分の運命と向き合っていかなければならない。

瑞生の任務は、夜はM・P。そして、昼は憐の監視だ。しかし、監視という行為を行っている事自体、次第につらくなってきている。出来れば、憐とは任務以外の立場で会いたいと言う思いが強くなっているのに、監視という仕事がその心を押しつぶす。その繰り返しだ。だが、TLTという組織で働く事への誇りと使命感が彼女の心を支え、皮肉にもそれが憐との関係を繋ぎとめているのも事実であった。

今日も監視もミッションが続いている。この任務が始まってから彼女はほぼ無休なのだが、憐の顔を見ることで少しでも力が湧く事をほんの少しだけ自覚していた。監視と言っても、決められた間隔の時間ごとに写真を撮影し、普段の生活や仕事と変わった事があれば適時記録し、それを定時報告するぐらいだ。憐の休日以外は尾行することもないし、最近では向こうから接触してくるため、仕事の体をなしていないのが本当の所であるが……。

今日の監視では、少しだけ変わった事があった。とは言っても、憐のルーティンワークの中で発生した些細なことだ。憐が働いているレストランの近くで、泣きながら歩いている女の子の姿を見つけ、憐がその子を迷子センターに連れていった程度の事である。しかし、瑞生に下った命令では、少しでも変わった事があったら記録して報告しろという事であったから、二人の後をつけその様子を撮影しな

がら観察していた。迷子センターでも子供は泣きやまず、憐はどうしようと考え込むと、センター内にあった風船を使って、様々な動物の形を作り始めた。瑞生も憐の風船細工は見た事があり、最初は作りが子供ぽかったのが、試行錯誤を重ねる内に職人肌と見える腕にみるみる内に上がっていった。憐が作るその見事な風船の奇想天外な世界に、子供は次第に泣き止むと目を輝かせながら夢中になり、満面の笑みを浮かべている。憐は、年齢の割に子供っぽい所があるせいか、子供にすぐ懐かれる所はあるが、あれだけ人見知りの激しそうな子がすぐに懐く様子を見ると、これだけ純粹で優しい人を監視する自分が嫌になるの瑞生は感じた。

「嫌な仕事。自分の事も嫌になりそう……」

ぼつりと本音を漏らすと、親子連れが迷子センターに駆け込んできた。どうやら、女の子の家族らしい。父親は落ち着こうと努力はしているが、子供を見失った事態にはさすがに冷静ではいられず、声が大きくなっている。瑞生は、これが私の仕事と言い聞かせながらその様子を観察し、画像に記録をとっていく。父親は相変わらずあわてていて、母親に落ち着くように言われているが、その母親も取り乱しているから始末が悪い。そこに憐が顔を出し、とりあえず落ち着いて下さいと話しかけ、相手の名前を確認する。

「美空ちゃんの御家族ですよ」

「すみません、取り乱しまして。そうです、美空の父で真木と申します」

フォートレスフリーダムの会議室では、松永が重要書類に目を通していた。デスクワークが多い仕事であるが、彼が事実上にこの「T-T-J」の中心人物と言つてよく、かなりの権限が与えられている。

瑞生の憐れに対する監視も、彼から直接下されたものだった。彼女の報告はすべて、彼に送られてくる。そして、その定時報告のレポートと画像がメールとなって彼のパソコンに送られてきた。これまでの所、彼が注目すべきことは何も送っていない。まだ動く時ではないと松永は感じていて、今日も報告してきた情報もその代わり映えのしないも報告の類だろうと安心しきっていた所に、一つの情報が彼の冷静さを破壊し、その結果、彼は驚きの表情を浮かべながら息を詰まらせていた。

「この男はまさか……。何故彼らは接触を。こんな事態は初めてだ」

松永は冷静に対処しようと努め、まず深呼吸をして気持ちを落ち着かせながら、携帯に登録されている首藤のナンバーを探してダイヤルした。

「私です。急を要する要件ですが、今そちらですぐに動かす事ができる人間は何名いますか」

「……、二名でしたら、余裕を持って対処できますが」

「では、彼らを野々宮さんに合流させてください。ただし、監視ターゲットは千樹憐ではありません。今から送る画像の人物をマークしてください」

「わかりました。瑞生には何か指示は」

「バックアップが到着するまでの間は、彼女に新ターゲットの監視をお願いします」

「わかりました。では、そのように手配します」

一連の指示を終えた松永は、まだ興奮冷めやらぬ面持ちで、画面

を見つめている。画像の中にあるある一人の人物に視線を注ぎながら。彼は画像に興味を引きつけられ、いつの間にか彼の後ろにイラストレーターが現われたことに気がつくのが遅れた。不意をつかれた松永は彼の声に驚き、肩をびくつとさせた。冷静な彼には珍しい事である。

「なかなか興味深い現象だね」

「イラストレーター……」

「随分と興奮しているね、僕が現われた事に気がつかないなんて。でも、ファーストとサードが接触した。これは、僕にも予想はしていなかったことだ」

「デユナミストの邂逅。これは偶然なのか、運命なのか。どちらかはわかりませんが、彼らを繋ぐ光の存在があるならば、私には無視できませんね」

「姫矢准が残した言葉の意味、『光は絆』。その意味の一つでもあるのかもしれない。デユナミストは光によって一つの絆を持っている。その真の意味はわからないけれど、絆が彼らの無意識化にあるのなら、この出会いは運命かもしれない。その運命の先は誰にもわからないけれど、それで、ファーストをどうするの」

「サード同様監視します。我々にはまだウルトラマンの力が必要ですが、サンプルが少なすぎる。手元にあるのは力も記憶も失った溝呂木のみ。サードに対して動くのはまだ早い。なら、ファーストの存在は非常に魅力的だ」

サードの対する動きという言葉に、イラストレーターは表情には出さないものの、少しだけ内心は反応した。彼とサード、つまり千

樹憐は、プロメテウスプロジェクトという計画から生まれた同じ出自である。そのため、任務に対して非情であったイラストレーターは、憐がデユナミストに選ばれた事により、心境に変化を起こしていた。

以前の彼にとって、ウルトラマンとは一つに現象であり、存在に過ぎなかった。つまり監視や分析の対象でしかないから、ウルトラマンに攻撃を加えてその能力や立ち振る舞いを見定めようとしたし、松永らがデユナミストである姫矢を捉え、人体実験まがいの様な事をしても静観するだけであつた。その力さえ手に入れば、ウルトラマンの存在は不要な要素になるからだ。

しかし、憐がデユナミストを継いだことで、彼の状況は変わった。同じ出生であり、最も心を許した存在であり、互いの運命を語りあえた者。彼にとって、憐はただの存在ではなく、唯一無二であつた。それ故、冷徹さ以上に情で動いてしまう心境がイラストレーターに生まれていた。そのため、憐がこの先迎える戦いの運命や、彼を一つの検体として扱う動きには敏感になっているのである。松永の言動に、姫矢の時と同じ行動をとりかねない様子を見るにつけ、イラストレーターの心中は穏やかにはなれなかった。

「ファーストへの監視に関しては、僕は知らなかった事にするよ。T.L.Tの意向に沿わない事をするつもりはないからね」

「それは、どうぞご自由に」

「忘れないようにね。ファーストはアンタッチャブルな存在だ。監視という行動がもし表沙汰になれば、北米本部が動くよ。それは、前線で戦う僕らにとってはあまり好ましい結果ではない」

「それはわかっていますよ」

「それならいいけど。それじゃあ」

イラストレーターは姿を消し、松永は一人残った。そして報告の画像を拡大しながら、ファースト、真木の顔をじっと見つ目ながら、ぼつりとつぶやく。

「ファースト、そしてネクストと呼ばれた、それは忘却の海に眠る者。そしてサードとの出会い。そこに、光の意味が必ずある」

本部からの指示を受け、監視ターゲットが変わった瑞生であったが、実際の所はその内容に大きな変更はなかった。迷子センターに真木一家も釘付けだからである。美空がすっかり憐に懷いてしまったため、そこから離れられないのだ。どうやら、美空は憐の風船で作る様々な物にすっかり魅了されて夢中になっている。

「これがキリン、こっちがライオン。ほら、そっちにあるのが像だよ」

「すごいすごい。じゃあ、今度は飛行機作って」

「飛行機かい。いいよ」

「ありがとう。お兄ちゃん、うちのパパね、飛行機に乗っているんだよ」

「飛行機に乗っているって、どういうことなの」

「パパはパイロットなんだ」

誇らしく父親の職業を話したのは、美空の兄の継夢だった。どうやら父さん子らしく、自分の父親の職業を誇りに思い、機会があれば誰にでも知って欲しいようだ。真木も、自分の子供が機会あるこ

とに職業を公開する事に照れ臭さを隠せない様子で、苦笑いしながらたしなめている。

「こら、継夢。あまりお父さんの仕事を人に喋るもんじゃないって言っているだろ」

「だって、嘘ついてないよ。それにね、お兄ちゃん、パパはもつと前はイーグルドライバーだったんだよ」

「継夢、もうやめなさい。すみません、あまりこういうことは人にベラベラ喋っちゃいけないと言っているんですが……」

「お父さんの自慢を出来る息子さんなんていいじゃないですか。でも、自衛隊の戦闘機のパイロットですよ。すごいなあ……。継夢君と美空ちゃんのお父さんで、すごいカッコイイね」

「うんっ」

兄妹は笑顔で元気よく答えた。それ以上に憐は、子供以上に目を輝かせて真木を見つめている。これでは、どちらが子供かわからないほどだ。しかし、余りに憐に懐く子供達に、真木夫妻も驚いている様子で、妻の蓉子が子供たちが仕事の邪魔をしていると思い、憐に頭を下げている。

「本当に申し訳ありません。迷子になっている所を保護していただいた上、仕事のお邪魔までしてしまって」

「あ、全然構わないですよ。俺、子供は大好きですし。でも、最初はずっと泣いていて心配しました。でも、美空ちゃんとは友達になつて、継夢君ともすぐに仲良しになれましたよ」

「ありがとうございます、こんなにしていただいて。でも、不思議

だわ。継夢はそうでもないんですが、美空は人見知りが激しくて、なかなかよその人に懐かないんです。特に主人以外の男の人に懐く事は殆どないのに……」

「そうなんですか。ここにいる時は、全然そんなことはありませんでしたよ」

両親とも、美空の憐に対する懐き具合に不思議な表情を浮かべているが、家族以外の誰かと仲良くなれる事には越したことはない。しかし、いつまでも憐を拘束しているわけにいかず、何とか連れて行こうとするが、美空は憐の陰に隠れてしまい、埒が明かない。そこで憐は、風船で作った動物などをすべて紙袋にいれ、それにたくさん様々な色の風船をつけて、美空に手渡した。

「じゃあね、この風船で作った動物、全部美空ちゃんにあげるよ。風船も一杯入れたからね。もし、風船で何か作りたくてわからなかったら、またここにきてお兄さんと遊ぼうね」

「うーん、わかった。ありがとう、お兄さん」

「どういたしまして」

真木家族は憐に頭を下げて礼を述べると、四人揃って他のアトラクションに向かっていった。瑞生は、まだ交代の要員が到着していないので、真木一家の尾行を開始する。一段落した憐は、瑞生を食事誘おうとその姿を探したが、先程までいたベンチにはその姿がなかった。

「あれ、瑞生、どこにつたかな。昼飯一緒にするはずだったのに」

約束もしていないのに、するはずと言つてのける図々しさが憐らしい。とりあえず、時間は憐お昼休みの時間なので、一人でさっさ

と昼食を済ませようと歩き始めた瞬間、憐の背筋に冷たいものが走った。周りの音はかき消され、人の声も聞こえない沈黙の世界。動いている人達も見えはするが、ただの映像のようにしか見えない。そこまで感覚を奪ってしまうほど、憐の脳に直接働きかける気配は異常で、それは殺気と言えるものであった。エポルトラスターも異様な反応を見せ、小刻みな反応を続けている。そして、憐の体に何者かの視線が突き刺さってきた。

「誰だ。俺を見ているの誰だ」

日ごろから憐は、正体不明の人物に監視されているのを感じ、犯人をあと一步まで追い詰めた事もある。だが、今感じるのはそれはまったく異なる物、人とは思えないほどの殺気である。

「誰だ、姿を現せ」

姿なき存在の殺気に憐は汗が玉のように噴き出し、呼吸も苦しくなり、次第に冷静さを失っていく。辺りを必死に見渡しても敵の存在は見当たらず、焦りは増すばかりである。そして、そんな憐を見下ろすかのような不敵な声が憐の耳に、いや、脳に入り込んできた。「それほどまでに怖いのか。私に恐怖するのか、光の者よ」

とうとう声を発した謎の存在に、憐の緊張の糸はついに切れた。

周りに人がいるにも関わらず、憐は声を張り上げるが、周囲の人々に憐の声は届いていない。まるで、存在が異次元に放り込まれたかのように。

「誰だ、お前は誰なんだ。姿を見せろ」

「お前が光なら私は闇。お前が実存なら私は観念の存在。互いに相容れぬ、拒絶し合う異界に生きる者だ」

「観念の存在……」

「私に肉体はない。だが、それゆえにこの世界の法則から解放される高次の存在だ。名は、ルシフェル。光も闇も制する者の名は私にふさわしい」

「何でもいいから顔を見せてみる。相手になつてやる」

「これが今のデユナミストか。青いな。いいだろう、では私のこの世界での姿を見せてやろう。振り向いてみる」

憐は、額に脂汗を浮かべながら、ゆっくりと後ろを振り向いている。彼の心の中には、説明のしようがない恐怖がわき上がっている。そして、後ろ振り向いた憐の視界に映ったのは、魔人とも、悪魔とも言い難い、この世界のいかなる者とも溶け合うことはない異形の姿があった。

フォートレスフリーダムの最深部では、イラストレーターがCICで、ビーストの出現の予測や監視、今後のTLTのとるべき行動の演算を行っていた。誰もいない小さなこの部屋が、彼の仕事場であり、戦場であり、同時にすべてである。他人から見れば、孤独としか言い様のないものであったが、彼自身にしてみたら、今さら孤独を感じることなど意味はないものだった。世界の中にいる彼は、最初から孤独なのだから……。

そんなたった一人の作業をしている彼の脳裏に何かが入り込んだ。ビジュアル化できない、言葉にも表せない何かが、頭の中を横切った様な感じなのだ。

「何だ、今のは」

イラストレーターはすぐにキーボードを叩き、自分の意識に干渉

したものの正体を探ろうとした。すべての端末がこんな状況になるとは。すると、パソコンからは警告音が鳴り響き、処理しきれない情報が画面にあふれ出してくる。それでも、必要のない情報を強制的に排除し、探し求めるデータを探し当てた彼は、そこに示された結果を見て絶句した。

「この振動波は……。こんな振動の仕方は信じられない」

イラストレーターの許で起こった混乱は、ナイトレーダーの作戦室でも起こっていた。各自に与えられたパソコンが異常を起こし、処理しきれないデータが流入していく。メインモニターにも滅茶苦茶な画像が溢れ、けたたましいノイズが鳴り響く。隊員達は突如起こったサイバーテロに、戸惑いと焦りの表情が顔に現われている。

「何が起こっているんだ。石掘、原因は分らないか」

「駄目です。いつさいのコマンドを受け付けません」

前代未聞のサイバーテロによる基地へのハッキングに、一同は唇を噛みながら事態を見守るしかなかった。

「ねえ、画面に何か映ってきたわ」

詩織の言葉に、ナイトレイダーは画面にくぎ付けとなった。彼女の言う通り、砂嵐の様々な画像が射しこまれてくる。それはどうやら、これまでT-LTが遭遇したビーストの画像だった。何体ものビーストの画像が消えては現われ、それを繰り返していく。すると、ある一つの影がビーストの画像を押しやって前にせり出してきた。その姿に、孤門は見覚えがあった。いや、忘れようがなかった。

「あれは、……、ファウスト」

それは、彼の恋人で会ったりコが、その死の際の恐怖に付け込まれて、その恐怖を基に作り上げられた魔人ファウストの姿だった。

しかし、彼女の本当の死により、ファウストは消え去ったはずだ。それがなぜこのような形で現れたのか、孤門にはまったく理解ができなかった。

やがて、ファウストの映像は消え去り、再びビーストの画像が乱舞する。やがて、ビーストの画像の間から、新たな影が姿を鮮明にしていく。

「メフィスト……」

今度は風が喉の奥から声を絞り出した。かつて、自分に戦士としての基礎を叩き込み、尊敬の対象でありながら、やがて戦うべき憎しみの対象へ変貌した溝呂木真也が闇と一体化して変身した姿、ダークメフィストの姿が、まるで地獄の底からよみがえったかのように、画面に映り込んでいた。

次第にメフィストの姿は消え去り、ビーストや闇の巨人の姿が激しく消えては現われを繰り返していく。そして、次第にそれは文字列に分解され、様々な文字が画面を点滅させる。すると、だんだんある特定の文字だけが拡大しながら点滅し、ある言葉を作り出していく。

L U C I F E R
「ルシフェル、か」

文字列を見た和倉が言葉を声にだして読みとり、ルシフェルという言葉を吐いた。ルシフェル。天使でありながら、神に逆らい天から落とされ、悪魔へ変貌した存在と知られる者。その名が何故TLTのコンピューターに侵入してまで流入してきたのか、誰にも理解できない事だった。

ルシフェルの名がメッセージとして流れると、それを最後に混乱はピタリとやみ、機器類は正常な作業を取り戻した。これまでの騒ぎが嘘のような静けさである。隊員達の心は、嵐が過ぎ去った直後だけに、落ち着きを取り戻そうとしても、渦巻く疑念や不安を押さ

えることはできなかった。

そんな彼らの許に、イラストレーターの映像が現れた。冷静な彼の姿は、ナイトレイダーにも僅かばかりの安堵の心を取り戻させた。しかし、凧と孤門だけは因縁の深い二人の闇の巨人の姿を見ただけに、心中穏やかではいられず、二人はイラストレーターに半ば詰め寄る形で質問を浴びせる。

「イラストレーター、今のは一体何だったんですか。なぜ、ファウストやメフィストの画像が現れたんですか」

「これは敵の仕業ですね。何故、敵はファイアウォールを破り、自分の事を探知される危険を冒してまでこんな子供じみた悪ふざけをしたんですか」

二人の剣幕にイラストレーターは全く動じず、まずは落ち着くように冷静に話しかけ、全員を席に座らせてから、事の次第を解説を始めた。

「まず、今度の敵はこれまでとはレベルが違います。溝呂木が以前、通信回線に侵入した事がありました。今回はレベルが違います。ルシフェルと名乗る存在は、短時間でこの基地のすべての回線を制圧し、システムの機能を奪い取るS級ランクのハッカーぶりを見せました。ルシフェルは、闇の巨人ともビーストとも一線を画す異質な存在です」

「異質とは一体……」

「和倉隊長。ファウストもメフィストも、斎田リコや溝呂木真也と言った人間と一つになることで誕生した存在です。それは、ウルトラマンとデュナミストの関係に近いと言えるでしょう。でも、ルシフェルはこれまでの巨人とはいくらか違う点があります」

憐の目の前にいる異形の影は、物陰に潜んではいる者の、白日の許堂々と憐と対峙する、大胆不敵なものだった。漆黒の体に血管が浮き出ている様に真つ赤なラインが細く走り、胸には鼓動する心臓の様な不気味なコアゲージを備え、口は耳元まで裂ける異形のものだった。極端な釣り目には彼に宿る精神の冷酷さ、冷徹さ、冷血ぶりを体現するように青に染まっている。ルシフェルは、地の底から響き渡るような薄気味悪い低音の声で、憐に話しかけてくる。

「デユナミスト、見つけたぞ」

余りにも気味悪い声と喋りたに、向う見ずな憐でさえ戦慄が走った。これまで戦ってきた幾多の強敵のビーストよりも遙かに恐ろしい、次元の違う存在に憐は虚勢を張る事だけが、唯一できる抵抗だった。

「一体何が目的だ」

「それだけか、口にできる言葉は。私の役目はデユナミストの抹殺つまり、お前の命をもらう事が目的だ」

「なら、戦うか」

「脅えて動けないくせに威勢だけはいいな。すぐには戦いはしない。恐怖に脅える心を破壊しながら、お前の光を奪う。それまで、自分が苦しむ以上の状況を味わうがいい。己の運命ゆえに自分を顧みないお前には一番堪えるはずだ」

「待て、ルシフェル」

憐は携帯していたブラストショットを取り出そうとした。あと少しで抜き出そうかというその瞬間、ルシフェルの姿は憐の視界から

消え失せ、そこには携帯でメールをしている女子高生がいるだけである。辺りには、全くルシフェルの姿も気配もない。「確かにいた。幻じゃない。どこに消えたんだ、一体」

憐は服をぐつしよりと汗で濡らし、流した汗の量で自分の感じた恐怖の大きさを実感した。しかし、ルシフェルの言った、自分にとって一番堪える状況とは一体何なのかがわからずにいる。一体、奴は何を企んでいるのか。緊張感を解く事ができず、目も血走っている憐だったが、自分を呼ぶ尾白の声でようやく我に返った。

「おい、憐、こんなところで何やってんだ」

「あ、悪い悪い。もう迷子がいなかったかなあって、見回りしてんだよ」

「いないだろ、もう。お前、今から昼休みだろ。休憩に入っていないぞ。おい大丈夫か、随分汗をかいてるけど。冷えるから着替えてこいよ。風邪引くぜ」

「へえ、随分優しい事を言うんだ」

「馬鹿、お前が欠勤すると、俺の仕事が増えて困るんだよ。部屋行つて着替えてろ。賄い持ってやってやるから」

「サンキュー。じゃあ、甘えさせてもらうよ」

憐はそう言うと、自分の部屋へと走っていった。とにかく、ルシフェルの狙いは自分であるのは間違いないのだが、どんな方法で迫ってくるのかわからないため、一人になった方がいいと思ったからだ。部屋に着くと憐は下着を取り替えた。ぐつしよりと汗で濡れた下着が、憐が無意識に感じた恐怖の重さを物語っている。自分が感じた恐怖の証を見つめながら、下着を洗濯かごに放り込み、新しく

乾いているものに取り換えた。それでも落ち着けず、温かい飲み物で体を温めようとインスタントコーヒーを入れ、口に運んだが、かすかに続くその寒気はしつこくまとわりつく。

ルシフェルの事を忘れようと努力するが、それを許さない原因があった。ルシフェルが現われてから、エボルトラスターが震えながら反応し続けているのだ。継続して反応するなどなかった事だけに、憐は常にルシフェルに監視されている様な気がしてならず、全く安心できなかった。

知らず知らずの内に憐はびくびくしながら、部屋の隅で丸くなっていた。相手がどんな手段でくるかわからない上の不安が、ルシフェルに対する得体の知れない恐怖と共に大きくなり、抑えきれないからだ。そんな憐を呼ぶ声が外から聞こえてきた。どうやら、尾白が昼食を届けに来たらしい。親友の声に少しだけ安心した憐は、部屋のドアを開け階段を下りていくと、尾白に礼を言った。

「サンキュー、尾白。もう腹減っちゃったよ」

「お前、本当に大丈夫か。顔色悪いぞ。具合でも悪いんじゃないか」

「大丈夫大丈夫。飯でも食べれば元気になるから」

そう言った憐が笑みを浮かべた瞬間、彼の顔に拳が打ち込まれ、体が壁に叩きつけられた。何が起こったのかわからない憐が視線をあげるとそこには尾白ではなく、彼を見下ろすルシフェルの姿があった。ルシフェルは憐の胸ぐらをつかんで体を持ち上げると、鉄製の階段に叩きつけた。不意をつかれた上、ルシフェルの容赦のない仕打ちに、憐は全く反撃する事も回避することもままならない。

「どうした、デユナミスト。もうサバイバルは始まっているぞ。お前の心か命が尽きるか、私が消滅させられるかのな」

「クソ、……。尾白は、尾白をどこにやった」

「お前の目の前にいる」

憐は、ルシフェルの言葉の意味を理解できなかった。いや、したくないと思ったと言う方が正しい。先程の女子高生同様、尾白もまたルシフェルの器にされている、そう認めるしかなかった。

相手が親友の体を使っているとあつては、憐に戦意を保てと言う方が無理であった。憐は己の体を顧みない戦いをするのとは逆に、自分の身の回りにいる人間の事をこの他、むしろ異常なほど気にかける。それ故に、ルシフェルの作戦は精神面に計り知れないダメージを与える。抵抗できない憐をルシフェルを執拗に蹴り続け、腹部を踏みつける。

「どうした、デユナミスト。こんな奴が光を継いだと言うのか。見せてみる、その力を。闇の前に幾度も立ちほだかり、追いかけて続ける光の継承者がこの様とは」

「尾白を返せ……」

「貴様は自分の身を守らない癖に、人の事はどこまでも守りかばおうとする。面白い奴だ。だが、そういう奴から先に死ぬ。デユナミストとはそういう連中なのだろうな。光の力の使い方もわからず、もがき続ける。憐れとしか言いようがない」

「返せって言ってるだろっ」

憐は思わずブラストショットを取り出したが、次の瞬間ルシフェルが消えうせ、目の前には尾白が立っている。自分に起こった事に全く覚えがないらしく、倒れている憐に驚いている様子だ。

「おい、憐、お前絶対やばいぞ。ぶっ倒れるまで無理すんなって。今日はもう休んでろ。後の事は俺に任せておけ」

「いや、大丈夫だから……」

「いい加減に一人で抱え込んで無理するのはやめろよ。やせ我慢して周りに心配かけて、そんなの友達って言えねえだろ。周りを信じて、少しは言う事聞けよな。とりあえず明日は休園日だし、その次の日はお前休みだろ。それだけ休めばまた普通に仕事できるんだから」

「ごめん……。後の事、頼む」

「それでいいんだ。ほら、飯ぐらいは食って寝てろよ」

尾白は憐を部屋に押し込み、仕事に戻っていった。憐は彼の言った言葉を反芻し、自分がムキになるほど周りの人間にひたむきになるのは、実際の所は自分の独りよがりなわがままの一つなんだろうと思った。本当の友達に信じあうこと。わかつてはいるけれど、周りにいる大事な人たちが掌からこぼれ落ちる砂のような存在に憐は思えてならないのである。

「俺は、俺は出会った人達だけは大切にしたい。そして、俺の事を覚えていて欲しい。でも、それが友達を遠ざけてしまう。それが怖い、怖いからなおさら俺は意地になる……。どうすればいい、ルシフェルからみんなを守るには、どうすればいい……」

憐がルシフェルの精神攻撃に苛まれている頃、ナイトレイダーのコマンドルームに集められた隊員達に、イラストレーターが様々な資料を集め、スクリーンにそれらを表示しながら、今後のミッシェンへの対応を話していた。

「まず、これらを見てください。ここに表示されたグラフは、これ

まで観測されたすべてのビーストの振動波です」

画面には、これまでナイトレイダーが、TLETが戦ってきたビーストが発していた振動波が表示されている。それらはどれ一つ同じものではなく、皆違う波形を示していた。

「うわー、これだけあって、一つも同じものがないんだ」

「当たり前だろ。ビースト振動波は個体個体で発するものだから、いわば人間の指紋に当たるものだ。一つとして同じパターンはない」

詩織の指摘に石堀は、人間の指紋という例えを出した。言い得て妙である。同系統のビーストには類似点はある。しかし、類似するだけで一致することはない。あくまで、ビースト一体一体が持つ個体識別信号、まさに指紋と一緒なのである。

「石掘隊員の指摘通り、これは人間の指紋と言っていいでしょう。どれ一つ、全く同じものはない。でも、ビーストには特定の波形、微妙な類似点が何パターンか存在します。これは、すべてのビーストに僅かでも必ずあります」

「イラストレーター。指紋のようにすべてが違うのに、パターン化された類似点が存在するというのは、矛盾しませんか」

「和倉隊長、なかなか鋭い指摘です。そう、まさに矛盾。矛盾に満ちた存在がビーストです。生物でありながら、自然のサイクルを拒み、共生を否定する生物。だから、違う振動波を持ちながら、そこにパターン化したものが存在する矛盾が成立する」

「どうもよく理解できませんが……」

「ビーストは常識では理解不能の存在です。でも、現れる現象は解

析できる。だから数パターンに分類できてしまう。でも、パターンに明確な違いがあるわけではない。これは、ビーストがそれぞれ起源を同じくし、短期間に多系統に枝分かれたからです。だから、彼らの違いは、ほんの僅かのパターンで整理でき、同時にきわめて似通ったパターンが、彼らが同一の起源を持つことを意味する」

隊員達は、これまでの意識を改めざるを得なかった。彼らはこれまで、正体不明の生物を便宜上ビーストと呼び、それぞれは別種類の個体だと考える節があった。だが、今の話では、ビーストはそれ自体が種であり、進化を驚くべきスピードで行っていく巨大な生物群と言えるのである。T.L.Tとビーストの戦いは、この地球における種の生き残りをかけた生存闘争という壮大な意味合いを帯びてくるのだ。課せられた任務が想像以上の重さを帯びている事に、全員こくりと唾を飲み込みながら、イラストレーターの話に耳を傾けている。

「では、次の段階に話を進めます。この度、T.L.Tの電子頭脳を一時的にしるハッキングして制圧したルシフェルと名乗る者。彼と一応呼びますが、彼が侵入した際に、消そうと思えばできる技量を持ちながら丁寧にもこのビースト振動波の様なものを残しましたしたが、それがこれです」

画面にルシフェルの残した振動波のグラフが出されたが、どのビーストたちとも一致しない、乱れているとしか言えない滅茶苦茶な波形が映し出された。果たして、ここからどんな事がわかるのだろうか、と、隊員達は固唾を呑んで話に聞き入っている。

「このように乱れに乱れた波形ではありません。ですが、ビーストが発する数種類の類似パターンを抜いてみると、かなり鮮明な波形に変わります。これから言える事は、ルシフェルはビースト因子を持つ存在だと言えます」

「つまり、ルシフェルは知的なビーストという事ですか」

「和倉隊長。この話にはもう一つ次の段階があります。この二つの波形を見て下さい。この二つの波形は微妙に違います、やはり類似した部分を持っています。このパターンをルシフェルの波形から、さらに省いてみます」

すると、ルシフェルの波形と残り二つの波形はほんのわずかの誤差はあるものの綺麗に一致した。これは何を意味するのだろうか。
「この程度の誤差であれば同一種の波形と判断して差し支えありません。純粋な微々たる個体差と言えます。実は今省いた波形は二人の闇の巨人、メフィストとファウストが持つ波形です。ルシフェルはこの闇の巨人と同系列、そして二人の能力をも併せ持つ存在と言えます」

一同は驚きを隠す事が出来なかった。かつてウルトラマンの、ナイトレIDERの前に立ちはだかり、強大な双壁となって立ちはだかった闇の巨人の三人目が現われたという事実は、彼らにさらなる過酷な戦いを課すことを意味している。そして二人の闇の巨人に浅からぬ因縁を持つ孤門と凧には一層複雑な感情を強いる事になる。話を聞きいつていた孤門だが、モニターに映し出されたグラフを見ている内に、一つの疑問が生じた。ビースト振動波と闇の巨人の波形を省き続けた果てに残ったあの波形を何を意味するのだろうか。すべての要素を省けば、何もなくなってもいいのではないか。

「イラストレーター、一つ質問が」

「何でしょう、孤門隊員」

「ここに残った波形の意味はなんですか。ビーストと闇の巨人の要素を省けば、何も残らない事になりませんか」

「あなたは、どこか人が見過ごしがちな事に目をつける天性の才能がある様ですね。いい質問です。ここにある波形はR7性因子。宇宙から降り注いだ宇宙線の一種で、知的生命体、つまり人間に個体差はあれど発生するものです。実は、TLTではこのR7性因子がデユナミストの条件になるのではないかと言う仮説がありました。ですが、姫矢准の体を検査した際、彼のR7性因子は通常の人間とほとんど変わらない数値であると判明し、R7性因子は人類が誰でも持っているポピュラーなものだと言う事がわかりました。いわば、人類特有の振動波と言えます」

「それって……、ルシフェルはビーストと巨人の特徴を備えた人間という事ですか」

「そういう事です。孤門隊員に酷な事実かもしれませんが、ここに残る三つの波形は、斎田リコ、溝呂木真也、そしてルシフェルの物です」

「これがリコの……」

孤門は悲痛な面持ちで、モニターに映るファウストの波形を見つめていた。愛した女性の思い出ではなく、数値化されたデータをこのような形で見せられると、まるで彼女が人ではなく名もない一体の生物として扱われている様な気がしてならず、心を締め付けられるような痛みが走り、モニターを直視できなかった。凧もまた、溝呂木の残した波形を見つめていたが、彼女は怒りとも憐みともつかない表情で、そのデータを凝視している。和倉は二人に漂う空気を察し、イラストレーターにモニターを消すように目で合図した。それを察した彼はモニターを消し、最低限の情報を彼らに伝えた。

「ビースト、巨人、人間、三つの要素が複雑に絡み合う存在、それ

がルシフェルです。現在、彼の痕跡を追ってレッドトルーパーが捜査をしています。短時間ではありますが、サンプルとなりえるルシフェルと思われる波形を探知しましたが、あまりに一瞬のことで場所の特定は現在継続捜査中です。ただ、厄介な問題があります。ルシフェルに含まれるR7性因子がどれも僅かに違い、一致しない事です。仮説として成り立つのは、ルシフェルは器となる人間を転々と変え、ルシフェルという存在を具現化する新しいタイプである、第三の闇の巨人という事です」

沈黙がコマンドルームを支配している。全く想像もつかない新たな敵の前に、これからどんな戦いが待っているのか、不安や恐れが彼らの中に小さな目を芽生えさせていた。彼らを見つめていたイラストレーターだったが、何か連絡が入ったらしく目線を逸らしながらどこかと通信しているようだ。そして、その内容をナイトレイドーにも中継する。

「レッドトルーパーからの連絡です。これはナイトレイドーと情報を共有すべき内容ですので、こちらにも中継します。小林隊長、報告をお願いします」

「わかりました。先程検知したルシフェルの波形ですが、だいぶ発信地が絞れてきました。また少し、人口密集地に食い込んでいますね。特定はできませんが住宅地が点在し、後は人が集まる所として遊園地がありますね。この辺りが臭いますね」

遊園地という言葉に孤門とイラストレーターが少しだけ表情が変わった。彼らは、憐が遊園地で暮らし、働いている事を知っているからだ。つまり、ルシフェルの狙いは憐と言う可能性が高いと言う事だが、デユナミストの件はまだ極秘情報ということと、憐の事はまだ伏せておいてやりたい二人の思惑があるため、彼を守ってやりたいがそれを口に出せないでいる。連絡を聞いたイラストレータは、

職務として冷静に次の指令を伝える。

「小林隊長、同じポイントにに集中する傾向がある以上、そのポイントに何か敵の狙いがある可能性があります。その辺りを入念に調査し、データをCICに転送して下さい。後はこちらで解析し、さらにポイントを絞り込みます」

「了解。捜査を続けます」

イラストレーターは孤門に目で合図し、憐の事は互いの秘密として何とかするべきだと言う意思を伝えた。孤門も自分に出来る限りで、デUNAミストとして人に話そうとしない運命を抱える憐に対して手を貸そうと決意していた。

「和倉隊長、巨人はダークフィールドを自力で発生する力を持ちます。出現した際は、ウルトラマンとの戦いに移行するのは、まず避けられません。ナイトレIDERにいつスクランブルがかかるかわからないので、出動態勢は整えていてください」

「わかりました」

和倉への命令を伝えると、イラストレーターはホログラムを消し、CICで一人思案を巡らせていた。しかし、彼には憐の事以外にもう一つ気になる事があった。

「奴が出演した遊園地には、今は憐だけでなくファーストも存在している。これは偶然なのか……」

ファーストの事は、松永が上層部には内密で動いている不安定な状況だ。そしてその近くに憐が、ルシフェルがいる。偶然でこれだけの要素が重なる確率はどれだけのものか、イラストレーターは考え続けたが結果は何度繰り返し返しても一緒だった。

「やっぱり偶然じゃない。ルシフェルがこのタイミングで出現した

のは、必然なんだ」

何かに気がついた彼は一心不乱に何かを考えだし、モニターに向かった。彼の目はいつも以上に真剣味を帯びていた。

緊急の指示を受け、真木の家族の監視を行っていた瑞生は、引き続きあの顔₂区の監視を行ってはいたものの、どこにでもいる仲のいいあの家族を何故監視しなければならないのか疑念を感じずにはいられなかった。自分の報告した物によりあの家族が監視の対象になったのなら、それはあまり無視できる事ではないし、仕事の命令とは言え気分のいい指令ではない。かといって、自分の様な立場の人間には、知る必要のない情報は下りてくるはずはないし、情報を降ろすことも必要な行為でもない。そうは言っても、どこにでもいる平凡な家族の監視というのは、違和感を感じるし、裏の思惑を感じずにはいられなかった。

複雑な感情を抱きながら命令された任務を続けていた瑞生の許に、やっと交代の要員が到着した。一人は首藤の片腕的存在の三沢と、もう一人は瑞生より少しキャリアが長い秋山である。

「瑞生、待たせたな。ここで監視対象が変わろう。お前は通常任務に戻っていいぞ」

「わかりました。よろしくお願いします」

瑞生は二人に一礼すると、憐の監視業務へと戻っていった。その彼女を三沢は苦笑いしながら見送っていた。

「まったくあいつは。こんなところで男二人に仰々しくお辞儀なんかしたら、周りから目立つだろうに。ああいうのを詰めが甘いつて言うんだ」

「まったくですね、三沢さん。瑞生は有能なんですけど、想定外の事が起こると、時々ああいうミスをするんですよ。まあ、大事になる様なミスは今の所ありませんが」

「そう思うか、秋山。あいつの監視任務だって、面が割れた事が幸いして続いているんだぞ。期待の新人もまだまだまだ指導が必要だって事だ」

二人は笑みを浮かべながら二手に分かれ真木の監視を行っているが、確かに彼らは周囲に溶け込み、ターゲットに気付かれないポジションと素振りをしている。監視という任務に関しては、やはり彼らの方がテクニクが一枚上手なのは間違いない。

真木の監視を引き継いだ瑞生は、憐の監視に戻るためレストランに向かったが、彼の姿はなかった。他の仕事についているのだろうかとかあたりを見回していると、針巢が瑞生に話しかけてきた。彼とは、繰り返してここに通っている内に顔見知りになり、よくしてもらっている間柄になっていた。

「おお、瑞生ちゃん。どうした、憐の事を探しに来たのかい」

「あ、いや、まあ。そういう事になるんですけど」

「とぼけなくていい。けど、悪いなあ、せっかく来てくれたのに。あいつ、体調を崩して今日は早退なんだ。何なら、見舞いにでもいつてくるかい。何、スタッフルームとは言っても、今は完全にあいつの家だ。開園中に行っても構わんよ」

「そうですか……。じゃあ、少し様子を見に行ってきます」

瑞生は針巢に断りを入れた上で、憐の部屋に向かう事にした。傍から見ても、瑞生自身にとっても公私混同なのはわかっているのだ

が、そこは何とか整合性をうまくつけているのを装いながら、彼の部屋の前に辿り着き、ドアをノックした。

「憐、針巢さんからあなたが体調を崩したって聞いたけど、大丈夫なの」

瑞生は憐の返事を待ったが、返事はない。眠っているのだろうか。
「憐、寝ているの。開けるわよ……」

瑞生はそつとドアを開け部屋の中に入った。墓はしんと静まり返り、人の気配がない。憐の姿はベッドにもなく、部屋は無人だった。
「憐、どこに行ったの……」

彼女の言葉は、監視対象ではなく、あくまで憐の事を本気で心配しての言葉だった。一体、どこに姿を消したのか。

実は、憐は彼女が部屋に辿り着く前窓からに姿を見つけていた。いつもなら、彼女の会う事が憐の一番楽しみにしている事なのだが、今は一番恐ろしい事であった。何故なら、ルシフェルは自分の近くにいる人間に憑依する、そんな行動をとるからだ。最初の女子高生、次の尾白、どちらも自分のそばにいた。そして、一人で部屋に居る間は襲ってこない。自分のそばに人がいるときだけ、その人物に乗り移る、憐はその事に気がついた。だから、今瑞生と接触すれば、彼女にも容赦なくルシフェルは憑依するだろうし、寧ろそれを狙っているとも言えなくもない。それだけは、何としても避けたい。瑞生がああなるなど、一番考えたくないし、あつてはならない事だった。憐は、気がつかれない様にドアと反対側の窓から抜けだし、必死で走りながら瑞生から離れようとした。いや、誰にも会うわけにはいかないのだ。

柵を乗り越え、遊園地の外に出た憐は、辺りを警戒しながら歩いていたが、運悪く角から飛び出してきた自転車に乗った女性と接触しそうになった。瞬間的に女性と目が合った憐だったが、次の瞬間

にはその姿がルシフェルに変わり、憐の前に立ちはだかった。後ずさりする憐を嘲笑うように、ルシフェルは距離を詰めながら歩いてくる。

「どうした、デユナミスト。逃げるのか。それは無理だ。人がいる限り、私はお前の前に現われる。お前に逃げ場はない。そして、お前が守りたい人間にも私は入り込む。その時は、どうするのかな」

もはや、変身する気力もブラストショットを向ける意思もなくした憐は、ただルシフェルに背を向け逃げるしかなかった。誰に会うわけにはいかない、そう願っているにも拘らず、何人かの人とすれ違い、その度にルシフェルは憐に自分の姿を見せつけてくる。憐は自分にはもう逃げ場がない事を悟るしかなかった。逃げれば逃げる程、ルシフェルに憑依される人々が多くなっていく。そう、自分が存在する限り、被害者は増えるのだ。

憐が逃げ回っている頃、イラストレーターはレッドトルーパーから送られてくるデータを休むことなく分析していた。食事さえとる暇も惜しんで、あくまで友人として憐を助けたい、その一心だった。憐の周りにルシフェルが現われた瞬間の振動波も捕らえられるほど、レッドトルーパーの網は狭められたいた。もうそれだけで十分すぎるデータが揃っている。そして、イラストレーターはある事実に気がついた。

「これだけ人がいるにも関わらず、どうやらルシフェルは憐に接近した人間にしか憑依していない。何だ、ルシフェルに憑依する人間の共通点は……」

イラストレーターは頭を抱えながら、必死に考えた。もはや任務を超えた私情で事に当たっている。以前の彼なら、どんな非常な任務にも対処できたし、命令も下せた。だが、憐との再会により、か

つてまだ夢を持ち、友人たちと暮らしていた頃を思い起こし、彼にも人間性が芽生えていた。そして今は、友情という個人的な感情で事に当たっていた。憐を助けるためには、今は自分の力が必要だという使命感も加わり、彼の頭脳はいつも以上に激しく思考パターンを組み立て、答えを探し出す。そして、一つの仮説が生まれた。

「そうか。憐の近くにいる人間に憑依すると言う考えがそもそも違う。逆なんだ、ルシフェルは憐の、デユナミストのそばにいる人間にしか憑依できないのでは……」

イラストレーターはさらに細部まで分析し、ルシフェルのパターンにある奇妙な点を見つける事が出来た。それは、ルシフェルにあるR7性因子の波形が、憐の物とほぼ一致しているのだ。憐はデユナミストであるために、その波形は独特の物に変化している。だから、通常の人間とはパターンが違う。したがって、仮に一致するか類似する者がいるとしたら、同じような波形を持つ者、つまりデユナミストを経験し、R7因子の波形に変化を加えられた者しかいないはず。つまり、ルシフェルは憐の近くにいて、憐の持つ光に感応し、R7性因子のパターンが変化した人間に憑依する条件を合わせているのだ。

「そういうことか。でも、これでは憐の傍に近寄る者は皆ルシフェルになる。駄目だ、これじゃ有効な手を打つにはまだ至らない。まだ、策を練る必要があるけどマークはできる」

有効策は得られないが、出現パターンを見つけたイラストレーターは、調査に当たっているレッドトルーパーに、憐の生活圏に集中して調査をするように命令した。彼は、友を助けるためにさらなる答えを求めて思考を続ける。

方々を逃げ回った憐だが、夕暮れを迎え人通りが少なくなった頃

を見計らい、自分の部屋へと帰路についた。人通りが少ないこともあって、ささくれだつていた憐の神経も落ち着き、せわしく動き血走っていた目も穏やかな様子に戻っていた。敵がどこから現われるかわからないが、一度一人で落ち着かなければいけないと憐は考え、辺りを警戒しながらようやく部屋に辿り着いた。

とにかく疲れていた。このままベッドに身を投げ出して眠りにつきたい。心底そう思いながら信に手をかけた瞬間、憐がぎくりとした。ドアが開いているのだ。まさか人がいるのかと思い、憐は恐怖しドアから後ずさりした。そして、目の前のドアが開き始めた時、憐の表情は完全にひきつっていた。

「おう、憐。具合が悪いならちゃんと寝てなきや駄目だろ」

中にいたのは針巢だった。何か用がありここに来たのかもしれないが、今の憐にとっては、人の訪問は恐怖以外の何ものでもない。しかし、事情を知らない針巢は怪訝な顔で憐を見つめている。

「どうしたんだ、お前。幽霊でも見た様な顔して」

「は、ハリスだよね……」

「お前、本当に大丈夫か。ちゃんと寝てろよ。薬がいるなら買ってきてやるから。そうそう、中のテーブルにお前の今月分の給料置いておいたからな。給料日、お前は休みだろ。だから、今日の内に渡そうと思つてな」

「ありがとう、ハリス……。もう大人しく寝ているから」

「そうか。じゃあ、早く風邪を治せよ」

ハリスはそう言いながら部屋を出て行き、入れ替わる様に憐は部屋に滑り込み、ドアを閉めて張りつめた空気を破る様にホッと一息

をついた。何事もなくてよかった。憐をその場に座り込んでしまった。極度の緊張の糸が切れたためだ。思わずそこで眠りそうになったその時、鍵を破壊しながらドアがこじ開けられ、憐は襟をつかまれそのまま二階の高さから外に放り出された。体が地面にたたきつけられ、息がつまり全身に激痛が走る。突然の出来事に運動神経の言い憐でも受け身をとることができず、地面にうずくまっている彼を見下ろす様な、あの忌まわしい声が聞こえていく。

「油断してもらっては困るねえ。お前のゆく場所にいる人間はすべて私の体だ。だが、今はもうこの男しかない時間の様だ。少し、お前と遊びたくなってきたよ。さあ、私と戦ってもらおうか」

まるで戦う事、憐を追い詰める事が楽しみで仕方がない様子で、ルシフェルは憐の傍に降り立った。しかし敵がそばまできても、憐は立ちあがることはできない。ルシフェルの体には針巢の体が使われているため、憐には戦う事が出来ないのだ。動かない憐に業を煮やしたルシフェルは、腹部をけり上げ、引きずり起こすと壁に何度も叩きつける。

「さあ、その光を解放しろ。お前の光がどれほどのものか見せてみる」

「ハリスを返せ……」

「この男のことが。いいだろう、返してやるとも。俺と戦えばな。安心しろ、戦っている内はこの体を捨てていく様なことはしない。お前から逃げはしないからな」

「……、いいぜ、やってやる」

憐は体を引きずり起こしエボルトラスターを取り出すと、覚悟を決めた侍が抜刀するように、エボルトラスターを鞘から引き抜いた。

憐の変身を察知したイラストレーターは、同時にルシフェルの出現も感知した。まだ対応策が見つかっていない状態での戦いの発生はあまり好ましい事ではないが、憐の立場で考えればなりふり構ってられないのは理解できる。

「ルシフェルとウルトラマンが出現。レッドトルーパーは現場へ。ただし軽率な接近は慎んでください。ナイトライダーはチェスターで現場上空へ向かってください」

各部隊に指令を出し、彼は最も好ましい結果に向かうべく、最善の方法を探り続ける。だが、今は援護しかしてやれないのが精いっぱいだった。

「憐……」

憐はウルトラマンへと変身し、ルシフェルとの戦闘を始める。しかし、いつもの覇気はなく防戦一方になる。ルシフェルはそれに構わず圧倒的な強さを見せつけてくる。

「光よ、この程度の力ではないだろう。ファウストやメフィフィストを打ち破ってきた力を受け継いだ者がこの程度とは思えん。本当の力を出してみろ」

「うるさいっ」

「いいのか、打たれるばかりでは私には勝てないし、この男は救えないぞ。お前が敗れば、この体は永久に私の物になるかも知れないが、いいのか」

その言葉に敏感に反応したのか、ウルトラマンは猛烈な勢いで拳を続けざまに打ちこんできた。ルシフェルはそれをすべて受け流したが、油断した所に回し蹴りが即頭部を直撃した。大切な人を救

うために自分が死ぬわけにはいかないという憐の、ウルトラマンの覚悟の一撃だった。ルシフェルはその一撃を痛みなど感じていないかのように首を回しながら、深く裂けた口から笑い声を上げた。

「それでいい。この男の体を奪い返すには、お前は苦しみながら私と戦うしかないのだ。さあ、お前の力を見せてみる」

ウルトラマンは悲痛な覚悟を背負いながらルシフェルに立ち向かった。パンチを何発も打ち込み、キックをロー、ミドル、ハイと使い分けながらものすごい速さで打ち込んでいく。そしてルシフェルもまた同様に肉体を存分に使った技を繰り出し、一步も引くことはない。そして、ルシフェルの蹴りがウルトラマンを襲った瞬間、それを回避したウルトラマンがルシフェルの頭上を飛び越える際に、かかとを後頭部に打ち込みながら背後に降り立った。ルシフェルは頭部への攻撃に、前方にふらふらと倒れ込みそうになった。ウルトラマンはようやく優勢に立ったが、それは絶対的なものではない。

「それでいい。本気で来なければ、お前は私に殺される」

「……」

人質を取られている限り、決してルシフェルの精神的な優位性は揺らぐことはない。憐の精神的な怖れや動揺は、そのままウルトラマンの能力に影響する。そんな苦しい戦いを繰り返している所に、レッドトルーパーが到着した。彼らは、ルシフェルの姿を確認するとそれがターゲットだと理解した。

「ウルトラマンを援護。ルシフェルに向け攻撃開始」

彼らはデイトガンナーを構えて発砲した。その弾丸がルシフェルに当たる直前、それを遮る者が間に割って入った。それはウルトラマンだった。彼は盾となって銃弾を全身に受け、そのダメージで後ろに倒れかかる所をルシフェルが首に手をまわし、再び自分の

盾に使う様な態勢を取った。こうなると、レッドトルーパーも攻撃ができない。

「クソ、ウルトラマンを盾にしゃがった」

「何でルシフェルをかばうんだ」

軽率な接近を慎めと言われたレッドトルーパーだったが、敵が極めて近い所に出現した上、ウルトラマンが出現したとなれば、これまでの作戦のパターンでは、ウルトラマンへの援護は当然の形だからだ。そこで見たのがウルトラマンの不可解な行動と、ルシフェルがウルトラマンを盾に使う行為という事態に彼らは理解に苦しむしかなかった

「お前の友人どもは優しいな。俺の器になるかもしれないのに。だが、邪魔な事に違いない。二人きりで殺し合いを楽しもう」

ルシフェルは、不敵な笑みを浮かべると、体を勢いよく上昇させていきながら拳から暗黒の弾丸を空に放った。空に暗黒の雲が広がりダークフィールドGが発生していく。ルシフェルは己のテリトリーへとウルトラマンを引きずり込んでいった。

現場上空に到達したナイトレイドは、ダークフィールド発生との連絡を受け、ハイパーストライクフォーメーションに移行し、亜空間に突入していく。

「位相同期解析を開始。いや、何だこれは」

「どうした、孤門」

「隊長、機の計器に表示された位相パターンが今までと違って固定できず、ダークフィールドをロックできません」

「クソ、これも奴の能力か。石堀、何とかなるか」

「これは難敵だな。ですが、こちらでマニュアル操作して微調整します。……、よし、これを 機に転送すればいい。孤門隊員、これで行けるはずだ」

「了解。位相同期を確認。ダークフィールドに突入します」

クロムチェスター・ハイパーストライクフォーメーションはダークフィールドGに突入した。すると、突然目の前に岩塊が出現し、操縦桿を握る風は緊急回避を行う。全員に強力なGが加わるが衝突は回避できた。しかし、岩塊は一つだけではなく、あちこちに無数に浮遊している。異変はそれだけではない。チェスターの機器もこの空間の異常性を示している。高度計は滅茶苦茶な数字を次々と示し、水平を示す機器も方位を示す機器も、時間表示もすべてが狂っていた。

「ここは何なの。これじゃ、全く計器は使えない、すべてマニュアル操作で操縦も状況判断もしなければいけない」

風は、計器を使えないため、すべて五感に頼って音速で飛ぶチェスターを操縦しなければならなかった。また、状況を分析している石掘と平木も戸惑いを隠せなかった。

「これじゃ、敵がいてもロックオンもできないわよ。ちょっとヤバすぎるって、この空間」

「ここは普通のダークフィールドじゃない。物理法則を無視している、矛盾の空間なんだ」

異常な事態を無線で聞いていた孤門は、ここどこかで戦っている憐の身を案じ、その姿を探した。リーダーまでいかれてしまっているこの状態では、目で探すしかない。孤門は必死にウルトラマン

の影を探し続け、やっと下方にジュネッスブルーの姿を見つけた。
「隊長、ウルトラマンを発見しました」

「わかった。計器も使えない以上方角もわからない。風、孤門に操縦桿を渡せ。お前はガンナーを務めろ」

「了解」

操縦の機能が 機 操縦桿に移行し、孤門はウルトラマンの許に向かった。次第にその姿が接近して鮮明になってくる。ウルトラマンは膝をつき、ダメージのためかなり消耗しているように見える。最悪の事態だけは避けられ、孤門はホッとしてウルトラマンのそばを旋回した。しかし、その姿を見た憐はチェスターに対し、こっちに来るなという素振りを見せる。そのジェスチャーには強い拒絶の念がこもっていて、これ以上近寄ると攻撃してくるのではないかと思うほど、鬼気迫っている。

「憐、どうした。何を焦っている」

普段の憐を知っている孤門にしてみると、ウルトラマンの素振りとそこに漂う感情は、見た事のない生々しいと言っているものだった。まるで何かを恐れるかのような……。不審な思いを抱いている孤門の耳に、無線から和倉の叫び声が鳴り響いた。

「孤門、後ろから何かが迫っている。二時の方向に回避するんだ」

孤門は返事をする前に反射的に操縦桿を動かし回避行動とった。右側に飛行軌道を逸らしたチェスターの横を巨大な黒い影が横切ったのを、ナイトレイドの全員は目撃した。まるで小惑星帯のように無数の岩塊が漂う空間を、岩塊を蹴りながら縦横無尽に高速で移動していく暗黒の巨人・ルシフェルが、チェスターに乗るナイトレイドに不気味な微笑みを向けながら、自身とは対照的な鮮やかな

色の体を持つジュネッスブルーに襲いかかっていく姿だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2213y/>

ウルトラマンネクサス アージュブルー

2011年11月17日21時04分発行